

アブノダイバー

序章

「なあ、林、俺もお前も変態だ・・」

突然目の前に座る森から変態呼ばわりされて、普通なら腹を立てるところであるが、幼い頃から互いの嗜好まで含めて良く知り合う森から口にされたのでは別に腹も立たない。

「ああ・・そうだな・・」と、曖昧に言葉を返した。

落ち着いて考えてみても、常日頃自分で自分の事を変態だと思っているのだが、親友からその事実を客観的に指摘されたに過ぎない。

ここは繁華街に在るチェーンのコーヒーショップ。平日の昼下がりということもあって、店内はわりと空いており、大方は暇つぶしに談笑する奥様方や、仲の良さそうな学生さん達や、一人スマホやパソコンを操作する人くらいで、いい年した男二人が向かい合ってコーヒーを啜り合う姿は、それだけでも充分変態ぽい。

見るからに変人の森には親しく付き合う友達もおらず、俺が唯一の友人であったが、長い間^{あいだ}音信が無く、この前久しぶりに「会いたい」と連絡があったのだった。

「なあ、林、今は世の中自体がすっかり変態化してしまったと思わないか？」

自分達の姿が周囲からどのように見られているかも気にならないのか、相変わらず森は頬骨の浮かんだ痩せぎすの顔の奥からギラギラする目で俺の目を覗き込みながらしゃべり立ててくる。

無精髭の浮かんだ顎と、長い間散髪しておらず、朝起きたまま一度も櫛を入れた事のないようなボサボサの髪と、どうでも良いような季節外れの上下の統一感の無い服装も繁華街の人通りの中を歩くには普通の人なら恥ずかしいと感じるだろう。

この一風変わった、もう一人の変態男である森は、俺の幼なじみであり彼の事は良く知っている。

彼は生まれながらの天才なのだ！冗談やお世辞では無く、彼が本気で何かの研究に打ち込めばノーベル賞も夢では無いと信じていた。

東京の国立大学に一発で合格したが、大学生活に幻滅したのか1年程で退学してしまった。

それ以来、学校にも行かず就職もせず、自分の発明品や考案を企業に切り売りして生活しているのだが、それなりの収入はあるようで、生活には困っていないようだ。

彼の頭脳を金儲けに活かせばビル・ゲツのような億万長者になることも、研究に活かせばノーベル賞も夢では無いと思うのだが、彼は金儲けや名誉などには一切関心が無い。

彼の頭の中に在るのは変態だけなのだ！

「昔だったら官能小説に描写されるような・・今やそれ以上の変態行為が絵空事で無く実際に行われている。むしろ小説の方が現実に遅れているくらいだ・・」

相変わらず熱心に語りかけてくる。

「この間も人気の女性アナウンサーが褲を愛用していることを堂々と公表するぐらいだ。」

流石の森も周囲を気にしてか、話が聞こえないように小声で話しかけてくるが、明らかにそんな現状に苛立っている様子がうかがえた。

「ああ・・彼女可愛いな、俺大ファンだよ・・」

「昔なら、女の褲なんざ羞恥責めのテーマだぜ、それを今は若い女が自分から喜んで身に着けたがる・・」

不満そうな貌を浮かべて、すっかり冷めてしまったコーヒーを一口啜ると、

「それに、美容脱毛だ！アソコの毛をわざわざ金を払って抜いて貰う時代だぜ！アソコの毛を剃り上げるなんざ、官能小説の羞恥責めの定番だ！」

不満をぶつけるように興奮気味に喋り続けた。

「今や官能小説に出てくるような純真で貞淑な女は姿を消して、若い女はみんな盛りの付いた変態女だ！」

「そこまで言うかね・・」

「幼児愛の男が小学校の教諭になったり、小説にも出来ないぜ。近頃の虐め問題で報道される虐待なども小説の上を行っているぜ・・」

顔を赤く染め昂奮して喋り続ける森に流石の俺も辟易として言葉を濁した。

いくら変態の男同士とは言えど流石に周囲を気にして、大声で会話している訳では無いので、空いている店内で離れて座っている客には話の内容は聞こえていないだろうが、顔を赤くして興奮気味に喋るボサボサ髪の森の姿が奇異に映るのか、時々チラチラとこちらの様子をのぞき見するのが分かった。

「こんな変態化した世の中では俺やお前のような正当的変態は逆に生き辛い。そこで俺は考

えた・・」

「何を？」

「こんな変態が大びらになった世界では無く、まだ変態など一部の陰の部分に過ぎなかつた、女どもが真から恥じらいを感じていた、正常な世界に行って変態を楽しむ事を・・」

発展の末に文化が紊乱した今の日本では無く、世界にはまだ純朴さを残す国は多い。そのような国の純真な女を相手に変態行為をする事を森は考えているのかと想像した。

しかし、変態行為は外国でも忌避され、官憲に捕まった場合日本よりも重罪になる国は多く、その分リスクも高い・・

「そこで俺は考えた。」

「何を？」

同じ言葉を何度も繰り返すので、イラつとして俺も同じ質問を繰り返した。

「俺の持てる頭脳を精一杯使って、考えて考えて考え抜いた・・時には脳に血が上り過ぎて意識を失うことも何度も在った・・その結果、遂に俺は作り上げた・・」

「だから何を？」

森の口がボソッと動いた。

「何！？ タイムマシーンだあ～～～！？」

俺の驚いた声が店内に響き渡った。

店内の客が批難するように僕達の方をジロッと見つめた。

この天才は変態行為を為したいがためだけに、タイムマシーンを作り上げたと言うのか？

昔から彼の並外れた頭脳を知っている俺でも俄には信じ難い！

「今良い物を見せてやる。」

と、言うと懐からスマホを取り出して、俺の方に差し出した。

「俺は出来たばかりのタイムマシーンに乗つて、さるやんごとなき姫の館に忍び込み隠しカメラを仕掛けてきた・・」

スマホの液晶画面を操りながら喋り続けた。

「ほら見てみろ・・」

スマホを俺に向けた。

其処に映つたのは古風な広い日本風の建物の内部の様であるが床には畳が敷かれておらず、

一面の板張りであった。室内の造りは充分手の込んだ物であり、安い制作費の映画では出来ないセットだと思われた。

その部屋の中央には一双の屏風が立てられ、屏風の前には黒い漆塗りの箱が置かれていた。

その時奥の襖が開いて、一人の女が部屋の中に入ってきた。

歳の頃は二十歳前であろうか・・十二单と言うのだろうか、艶やかな色彩の着物を何枚も重ね着しており、平安時代の絵巻に登場するような高貴な身分の女性を感じさせた。

ふっくらとした頬を持つ瓜実顔の女の白く塗られた顔には丸い眉が描かれ、唇には赤い紅が引かれていた。近頃の若い女には先ず見られない古風な顔立ちであるが、それなりに美しい女だと感じた。その女が誰だか日頃映像でお世話になっているポルノ女優やグラビアアイドルの顔を思い描いたが、全く当てはまる女は思い浮かばなかった。そこから発せられる典雅なオーラは、近頃の尻軽の若い女とは全く別物であった。

女は漆塗りの箱の前に進み出た。箱の蓋は既に開けられていた。

次の瞬間俺の目はスマホの小さな液晶画面に釘付けとなった。

この平安貴族風の典雅な女は両手で着物の裾をスルスルと捲り上げ始めたのだ。

重ね着した着物の裾を大きく広げたので、むっちりとした白い大腿がしだいに露わになっていった。

更に着物を捲り上げたので双臀が丸出しとなり露出した股の間に濃密に繁った春草が出現した。

女はそのまま股を大きく割って黒塗りの箱を跨ぐと、カメラに向かって股間を開いて箱に向かって腰を降ろした。

漆塗りの箱の上で蹲踞する女に向かってカメラがズームして開け広げられた股間の一点に集中した。

一瞬露出が合わず画面が暗くなつたが、直ぐに露出調整され、開け広げられた白い大腿と毛黒い茂みが明瞭に映るようになった。

濃密な繁茂の陰から色素の沈着の無い鮮やかなピンク色の女性器がチラチラと見え隠れする。

近頃のAV女優なら下の毛の手入れはきちんとやっているものだが、この女は伸び放題のままでジャングルの様に縮れ乱れた下草をデルタ状に生やしていたが、逆に新鮮に映つた。

女の息む様な声が漏れ、箱の上に屈んだ腰が一瞬ブルッと震えた。

この黒い漆塗りの箱は‘おまる’で、これから排便をするところなのだと理解出来た。

昔平安貴族の邸宅には便所が無く、貴族は部屋の中で用便をして、使用人がそれを始末して

いたと聞いたことがあるが、それを再現したものだと理解した。

それにしても古風な建物の内部や、雅な衣装やアダルトビデオにしては随分と金を掛けた演出だと驚かされた。

俺は魅入られたように小さなスマホの液晶画面を注視し続けた。

正面に大写しになった秘園の裏側の肛門の様子は判らなかったが、息んでいた女の口から空気の抜ける様な声が漏れた。

そして、濃密な陰毛の奥に突き出した紅い肛門の端が垣間見え、その管の先から茶色い便塊がニュッと出現した。

肉付きの良い女の腰がブルブルと震えていた。一旦飛び出した便塊は一本の太くて長い塊となって股間から垂れ下がり、プチリと切れて漆塗りの箱の中にポトリと落下した。

それで堰が切れたように、その後、大量の便が腸内より流れ出し漆塗りの箱の中に蟠局を巻いて行った。

俺は目を見張って、液晶画面に映る若い女の脱糞姿を見続けた。

そんな俺の様子を満足そうに森が眺めていた。

「どうだ、面白いか？」

「ああ・・未発表の新作アダルトビデオか？それにしても良く出来ているな！」

「その糞を垂れている女が誰か分るか？」

森が意味深な笑みを浮かべて尋ねて来た。

「さあ？・・」

俺の知っているAV女優の中にはいない女だったので曖昧に返事した。

「ソイツはな・・」

口元に卑猥な笑みを浮かべてボソッと呟くように口にした。

「何！清少納言のスカトロだとお～～！～～～～！」

俺の驚きの声が静かな店内に響き渡った。

店の中の客や店員が唖然とした貌で僕達の方を見た。

人目を憚らない変態男であっても流石にそれ以上店には居られなくなって俺たちはそそくさと店を後にした。

通りを連れだって歩き、興奮して一方的にしゃべる森の話を聞きながら、森の自宅に向かう

事になった。

市の郊外にある新興住宅街に建つ何の変哲も無い小さな一軒家が森の家だった。

森の両親は既に他界しており、一人暮らしでろくに掃除もしないのだろう、玄関を開けると直ぐに ^{うずたか} 堆く積み上げられたゴミの山が目に映った。

「いつ来てもゴミ屋敷だな・・」

森に案内されるままに両側に屹立つゴミの山を搔き分け、足元のゴミを跨ぎながら奥に進んだ。

「これだ・・」

森が何かの設備を指し示した。

以前はリビングに使っていた部屋であったが、天井は外され剥き出しとなつた部屋の中にそれは在つた！

それは鉄やアルミや銅みたいな金属を組み合わせて作った球形の檻のような形をしており格子の周囲にはケーブルが幾つも巻かれていた。

昔の小学校の校庭や広場に在つた回転遊具の様な形をした直径3メートル程の球形の金属製の格子から何本ものケーブルが伸びて何かの機械に繋がつていた。

その機械の上にはコンピュータが置かれ、液晶ディスプレーは電源が点いたままであつた。

「これで女がまだ変態化されていない純真で恥じらいを持っていた頃に戻つて思い切り変態を楽しもう！それに過去に遡れば何をやっても全て時効だから警察に捕まる心配が無い！」笑いながらそう口にすると、装置の横にあつたゴミの様な物を搔き分け、何やらビニールで出来たような艶々したツナギの服を取り出した。

「一応、時間を旅するタイムダイバーだから、それらしい恰好をしないとな・・お前の分も作つておいた。」

光沢のある銀色の地に赤や青のストライプがデザインされた服を俺の方に拡げて差し出した。

「カッコいいじゃ無いか！それを着ると漫画の強化服みたいに力が倍増されるのか？」

「そんなに力は増幅される訳では無いが、ナイフやピストルの弾を通さない位の強靭性は持つてゐる。」

森の指導を受けながら着替えた。森もさつきまでのだらしない服を脱ぎ捨て着替えたので、まるでSF映画に出て来る未来の宇宙服を着た主人公の様な格好の二人が揃つた。

「さて、何処に行こうかな？美人でもただか弱い女を犯してもつまらないな・・貞淑だが強

い女を無理やり犯すのが面白いな・・そうだ！あそこに行ってみよう」

俺の意見も聞かず、傍らのコンソールの上に置かれたコンピュータのキーボードをカチャカチャと操作すると、俺の背を押して球形の格子の中に押し込んだ。

「おいおい！一体何が始まるんだ？」

狭い球形の空間に二人で並んで立つと流石に不安が込み上げて来てたずねた。

森は俺の問い合わせも耳に入らない様に、手にしたリモコンのような機械を操作していた。

周囲を取り囲んでいた球形の構造物がゆっくりと回り始め、やがて風を切るような甲高い音を発して高速で回転し始めた。

それと共に自分達の足元も頭上も周囲がまばゆく輝き始めた。

不意にフワリと身体が浮き上がるような感覚に落ちた。それは重力が無くなったと言うより、何か今までいた次元から切り離されたような感じであった。

虹の様にキラキラと輝くまるで靄の様なネットリとした光が全身を包み込むのを感じながら意識が遠退いて行った。

1183年 宇治川

木曾義仲追討の院宣を受けた源頼朝の命を受け範頼・義経の鎌倉勢が宇治川の東岸に陣取っていた。

京都に鎌倉勢を一步も入れないと、対岸には義仲の軍勢が対峙していた。

瀬田の唐橋を落としていたので、鎌倉勢が進軍するには流れの速い宇治川を泳ぎ渡るしか無かった。

後は上陸して来る敵軍を逐次撃破して行けば良い一義仲には勝算があった。

岸辺に對峙する軍勢を従え義仲と巴御前が陣頭に馬を進めていた。

「巴！いよいよ戦が始まるぞ！楽しみじゃのう！」

と、傍らに控える巴の方を振り返って興奮した声を上げた。

馬上に控える巴の姿をじっと見つめながら、今日の巴は何時もに増して美しいと感じた。

華美な彩色の施された華麗な鎧を身に纏い、細面の色白の顔面の額部分には黒光りする鉢金を巻き、黒くて長い髪を後ろに束ねたこの若い女武将は修羅場を目前に控えた緊張感で目はカッと見開き引き締まった表情を浮かべているが、その凛と引き締まった容姿を見詰めてい

ると、逆に今すぐにでも鎧を剥ぎ取り己の肉塊を埋めて見たい肉欲も昂じて来るのであった。戦を前にした興奮と愛しい女をじっとみつめる熱い視線を肌身に感じながら、この戦に関しては部類の才能を持つ男は、心から合戦を楽しんでいるのだと、まるで子供がオモチャを前にしてワクワクするように心を昂らせている男を見詰めて、頼もしいと感じると伴にまるで駄々っ子を見るような可愛らしさも感じて、じっと愛しい義仲の背中を見詰め続けた。

「おお！敵が川を渡り始めたぞ！いよいよ始まるぞ！」

興奮した声を発して、再び巴の方を振り返った。

「・・・・！！」

思わず、義仲が驚き、声を失った。

さっきまで馬上に在った巴が乗馬だけ残して忽然と姿を消していたのだ！

「巴！巴！何処に行ったのじゃ！」

最愛の女であるだけでなく幾多の戦も共に戦い最も頼りにする戦友でもある烈女の衆人に囲まれた中での突然の失踪というあり得ない事態に周章狼狽する義仲に最早軍を統率する能力は喪失していた。

鎌倉勢が次々と川を渡り始め、上陸し始めていた・・

フッと意識を取り戻した巴は異様な状況に驚愕した。

目を開くと広い青空が見えた。さっきまで愛馬に跨り義仲の傍に控えていた自分が何故か河原の上に仰向けに横たわっていることが分かった。

遠くからは喚声と刀を撃ち交わす音が木霊しており、戦は既に始まっており自分は合戦場からそれほど遠くに居ない事は理解出来た。

しかし、さっきまで馬上に居たはずなのに何故一人でここに横たわっているのか理解せず頭を激しく振り目を瞬かせた。

目を激しく左右に動かすと、身体の線が表れる様な艶々と輝る銀色の服に全身を覆われている二人の男が陰湿な笑みを浮かべて見下ろしているのに気付いた。

その二人の姿は味方の木曾勢や敵方の鎌倉勢やこの時代の人間の姿とも明らかに違っていた。「此処は？！」と、口にして身を起した巴に、興奮した林が「そんな事はどうでも良い。これから楽しもうぜ！」と叫んで抱き着いた。

「無礼者！」と林の身体を掴むと河原に投げつけた。

「痛ててて・・くそコイツ女のくせに何て馬鹿力だ！」

巴の足元に倒れる林が強^{したた}か打ち付けた腰を押えて忌々し氣に口にした。

「其方、鎌倉の手の者か！？」と、腰の刀に手を掛けた。

その時、森が背後からスタンガンを押し当てた。

瞬間強烈な電撃を受けてグワッと低い悲鳴を上げて身体を仰け反らした。

「ふふ・・全身金属の鎧に包まれているから良く効くぜ・・」

森がスタンガンを握ったまま薄ら笑いを浮かべた。

「俺の自家製のスタンガンだ！神経が麻痺してしばらくは身動きできないぜ・・」

森が嘸^{うそぶ}く通り神経が麻痺して全身が弛緩し全く身体を動かすことが出来ない様だ。

二人は歎声を上げながら鎧を止めていた紐に指を掛け、何本もの紐を解き、次々と甲冑を剥ぎ取って行った。

身体は力を失い弛緩したままだが、意識だけは戻り始め、激烈な刺激を感じた記憶は残っていた。まだ癒えぬその強烈な刺激のため体中が痺れて身体を動かす機能が麻痺している現実を思い知らされた。

何が起きているか理解できない巴にとって驚愕の目を左右させて、男達の狼藉を目で追うしか無かった。

身動きできない女の着ているものを剥がそうという男達に憤怒の目の色を浮かべた。声を出す機能はまだ失われており、男達の作業を見守りながら痺れて動かない身体にもどかしさを感じた。

男達は巴の身体からすっかり鎧を剥ぎ取り、若い女性らしい山桜色の小袖姿に向き上げた。

薄い布地を通して身体の線が浮かび上がっていた。

厚い鎧に覆われていた蒸れた体から汗の匂いと共に得も言われぬ女の体臭が込み上げていた。

林が鼻息を荒げて、乳房を剥き出しにしようと着物の襟に両手を掛けた。

その時残されていた力を振り絞り武者ぶりつく林の身体を突き放した。

再び巴に投げられて、腰を摩りながら「痛てて・・電撃のショックが切れて来た様だな・・」と、忌々し氣に声を上げた。

まだ体の痺れは残っている様で、巴から突き放されても大きな痛みは感じていなかったが、投げられた恨みを返す様に、スタンガンを握り締めると、剥き出しとなつた素肌に押し当てた。

グワッと悲鳴を上げると雷に打たれたような衝撃を感じて河原の上を転げた。

河原にうつ伏せに横たわり、荒い息を吐くだけで再び身動きできなくなつた巴を見下ろしな

がら、「今のうちに素っ裸に剥いで、縛り上げてしまおう！」と剥き出しとなった小袖に手を掛けた。

身体を動かす機能も声を上げる機能も喪失していたが、意識だけは戻り始めた巴は男達から着物を剥ぎ取られて行きながら、目には羞恥と絶望感が浮かび始めていた。

「コイツ男勝りの女のくせに大きなオッパイを持っているじゃないか！」

着物を剥ぎ取り上半身を剥き出しにさせた林が歓声を上げた。

無駄肉の無い色白の引き締まった体をしていたが、大きな乳房を持っていた。

「何時も義仲から揉み上げられ大きくなつたんだろう！」

自分ばかりか愛しい義仲まで愚弄されたと感じ、一瞬目に怒りの色が走った。

「それにしては、乳首は綺麗だぜ！あまり使い込まれて無いようだ・・」

林が薄いピンク色の乳首を指先でコリコリと揉みながら口にした。

男の指先を素肌に感じてゾッとするものが込み上げて来た。

「今のうちに縛り上げてしまおうぜ！」と一緒に持つて来た荷物の中から麻縄の束を取り出した。

筋肉の弛緩した上体を二人で支えながら、両手を後ろにねじ曲げ厳重に高手小手に縛り上げ、残った縄を前に廻して豊満な乳房の上下に二重三重に巻き付けた。更に首から降ろした縄で乳房の下を通る縄に絡げてグッと上に引き絞り、乳房の左右で上下を通る縄に門を施したので、豊かな胸は荒くれた麻縄で縊り上げられ、これ見よがしに前に突き出していた。

今や巴は下腹に僅かに短い腰巻を残すだけで、白い身体に黒ずんだ麻縄を纏った姿で河原に腰を落としていた。

縄止めを済ますと二人は前に回つて出来栄えを鑑賞した。

「やはり麻縄で縛り上げた女の姿は良いもんだ・・」

「昔の女には麻縄が良く似合う・・それにそこはかとない色っぽさがある。髪の毛を金色に染めた今の女を縛るのとは段違いだ・・」

「それじゃ早速腰の邪魔な布切れを取つてしまおう！」

美女の裸体鑑賞に満足した二人は腰の周りに巻いた丈の短い腰巻に手を掛けた。

その頃巴も激しい電気ショックから回復し始め、肌の感覚も戻り始めていた。

柔らかな下腹の肌の上で熱い男の手が動き回るのが知覚出来るようになって来た。

男の手で腰に巻いていた布が剥ぎ取られ、股間に冷たい風が入るのを感じた。

愛する義仲にしか見せたことの無い自分の体の秘めた部分が陽光に晒され、羞恥心が込み上げて来て、肌が赤く火照って行くのを感じた。

「ウヒョー！これが巴御前の股ぐらか！毛がモジヤモジヤじや無いか！」

巴の身体から腰巻を奪い去って、あからさまにさらけ出された股間の様子を目にして歓声が上がった。

「お前達は何者です！？これ以上の無礼は許しません！直ぐに縄を解くのです！」

やっと声を上げることが出来るようになり悲鳴の様な金切り声を発した。

露わになった股間をきつく閉じ、憤怒と羞恥の表情を浮かべていた。

「意識が完全に戻って来た様だな？ 僕達が何者か話してもたぶん理解できないだろう・・

ただ僕達はお前の事を殺したり傷付けたりしようと思ってはいない。これから少しの間お前と一緒に楽しい遊びをしようと言うだけだ・・」

森の不敵な言葉に巴の目に怯えた光が差した。

「これ以上妾わらわに無礼な事は許しません！妾は死・・」

必死に頭を振って此処まで口にした時に、突然グワッと呻き声を上げて身体を痙攣させた。

森が再びスタンガンを押し当てたのだった。

電撃のショックで河原に倒れ伏し身体をピクピク痙攣させる巴の口を押し広げた。

「舌を噛まれて死なれたら元も子もないからな・・猿轡を噛ませてもらうぜ！」

ショックで蒼白となる巴の口をこじ開けると、巨大な赤いボールを持ったボールギャグをねじ込んだ。顎を精一杯開かせて無理やり口の中に硬質樹脂のボールをねじ込むと、ボールから伸びた革ベルトを頭の後で固定した。

森から無理やり異物を噛まされながら目を白黒させる巴が居た。

「電撃の出力を弱くしておいたから直ぐに身体を動かせるようになるだろう・・」

「しかし、平安時代の女にボールギャグを噛ませるなど何か獵奇的だな！」

口を精一杯拡張し赤いボールを頬張る瓜実顔の巴の顔面に二人は魅入った。

巴の目が恐怖で見開き男達を見ていた。

ボールをねじ込まれた口の端からは涎が滴り落ちていた。

身体を折って乳房や股間を隠さない様に、ポツンと在った大石まで二人掛で引きずり上体を縛り付けた。

これで河原に尻を着いたまま上半身はがっしりと固定され身動きが封じられた。

まともに格闘すれば並みに男など蹴散らす自信はあったが、自分がこの男達に対して何も抵抗できない口惜しさと今の自分が置かれている惨めさに目に涙を潤ませた。

「何も恐れることは無い・・これから僕達と面白い遊びをするだけだ・・」と、言うと顔を巴の顔に近付け、舌を伸ばしてボールと唇の間に浮かんだ唾を舌先で拭い取った。

瞬間巴は唇を奪われたような感触に襲われ、声にならない悲鳴を上げて身体をビクッと硬化させた。

男達の淫らな視線を身体に浴びながら必死に身体を硬化させ、股間を硬く閉じ最後の部分を必死に隠そうとする巴に、「さあ、これから股を開いて肝心な部分を見せてもらおうか・・」と、淫靡な笑みを浮かべて冷たく命令した。

男勝りの怪力を誇る巴であったが、男二人で足首を掴んで左右に引っ張れば股を開かせる事は可能かと思われたが、このような烈女に力づくで挑んでも面白くない。自分で股を開いて男の目に晒す様に仕向けて一森は自ら股間を開いて秘裂を晒すよう命じたのだった。

絶望的な状況で巴はイヤイヤと首を振った。

「嫌かい？でも君は嫌でも股間を晒すことになるよ・・」

手にしたスタンガンを見せつけるように巴に示した。

1000 年近く前に生きた巴にはそれが何か全く理解できなかつたが、何度も身体に押し当てられた経験から恐ろしい刺激と苦痛を与えるものであることは身体に教え込まれていた。

森の手にするスタンガンの電極からは青白い火花がバチバチと飛んでいた。

巴にはこの二人が地上に降り立った雷神では無いかと恐怖した。

「出力を弱めておいたから、もう意識を失うことは無い・・だけどその分激痛が走るよ・・」
スタンガンを握ったまま冷たい笑みを浮かべた。

「ほうら」と、一言口にすると剥き出しの乳首に電極を押し当てた。

ギャッと悲鳴が上がり身体を硬化させた。

「どうだい？気を失う事が出来ないので、代わりに激痛が走るのが分ったろう？」

堪え難い苦痛を乳首に受けて、身体にビッショリ汗を浮かべ荒い息で肩を上下させる巴を冷たく見下ろしながら、「股を開いて僕達にオ [REDACTED] を見せつける気になったかい？」と、優しい口調で問い合わせた。

其処には義仲と共に戦場を駆け巡り敵を蹴散らした烈女の面影は消え去り、電撃の恐怖にブルブルと身を震わす敗北感に苛まれ涙を流す哀れな女の姿しか無かつた。

「さあ、股を開くんだ！」

この期に及んでもこの得体の知れない男の前で秘奥を晒す羞恥に堪えかねて、弱々しく首を振った。

「全く仕方ない奴だな・・」

頑なな巴の姿を冷徹な目で見詰めながら、無言でもう片方の乳首にスタンガンを押し当てた。

激烈な電撃にギヤー！と喉の奥から悲鳴を上げて身体を仰け反らせた。

恐怖の色を目に浮かべ自分の方を気弱に見詰める巴には最早抵抗の気力は無くなっていると読み取った。

「さあ、股を開くんだ・・」

バチバチと火花を散らす電極をゆるゆると臍の方に向けて行った。

目に涙を一杯に浮かべ、ボールギャグの下で何か呻き声を上げながら拒否するように頭を激しく振った。そしてジワジワと固く閉じられていた股間を開き始めた。

「おお！開き始めたぞ！」

男達の暴力の前に敗れ去り開城し始めた様子に声が上がった。

二人は生唾を呑み込みながらその様子をじっと見つめていた。

濃密な繁茂の下からまるで熟れた桃を割った様な柔らかな肉置きの肉丘が見え始めた。

「さあ！いよいよ巴御前の秘仏の御開帳だ！」

林のはしゃぎ声に一瞬羞恥心が蘇りビクッと股間を閉じようとした。

「何をしているんだ！早く股をおっぴろげるんだ！」

スタンガンを目の前に見せ付けながら命じた。

堪え難い電撃の苦痛への恐怖心に負けて再びおずおずと開き始めた。

「おお！見えて来た！見えて来たぞ！」

目の前に現れ始めた美女の秘奥の様子を股間に顔を突っこむ様にして覗き込んだ。

其処には羞恥と興奮に赤く充血した秘唇が在った。

正体不明の男達に秘奥を晒す羞恥と恐怖心に股間を大きく広げたままブルブルと身体を震わせていた。

「まだ見えんぞ！もっと大きく開くのだ！」

既に股間は既に大きく開き、開け放たれた中心部分には女の命が宿る場所が陽光に明々と照らされていたが、更に巴の羞恥心を煽るように過酷な命令をした。

森の言葉に逆らえず、涙をしゃくり上げながら、自分の力で開く限界まで股間を開いた。

男達の目の前で大の字開きとなった巴の姿を暫く満足気に鑑賞していた森達だったが、別の縄を手にすると左右の足首に縛り始めた。この後巴が羞恥の余り再び股間を閉じない様に股を開いたまま固定しようとの算段であった。

両足首を縛った縄を後ろに廻し、大石の背後で固定した。

更に脛や太腿にも縄を掛け、大石に背中を預ける形のままM字開脚に縛り上げてしまった。

改めて恥ずかしい部分を隠す能力を失った巴の股間に鼻先を近付けてその部分を観察した。

「^{くさ}臭～！」

林が女性器から立ち昇る異臭を嗅いで大声を上げた。

「今の時代の女と違って毎日入浴しないし、石鹼で其処を洗う事も無いから臭くて当たり前だ！もっとも俺はそんな匂いも好きだがな」

と、曝け出された秘園に鼻先を突き出し香^{かぐわ}しい匂いを嗅ぐように鼻を蠢かせた。

そんな森の様子に、コイツは本物の変態だ！と感心した。

顔を股間に突っ込んだまま M 字開脚され隠す物の無くなった秘奥を更に露出させるよう指先で春草を左右に押し分けた。

濃密な縮れ毛の間から赤く充血した秘肉が現われた。

「フーム、まだそんなに使い込まれていないようだな？綺麗な物だ・・・だけどこの毛が邪魔だな・・」

シャリシャリする縮れ毛を指先で摘まんだり撫で上げたりしながら呟いた。

「剃っちゃえ！剃っちゃえ！」

森の独り言に林がはしゃいだ声を上げた。

シェーバーを手にして開け放たれた股間に迫った。

その手にする道具が再び激痛を与えるものでは無いか？と恐怖した巴が縛り上げられた身体を硬直させた。

巴の身体は今はテーブルの様に平らな大石の頂上に後手に縛った背を載せる形で、剃り良いように股間を大開きの形で縛り直されていた。石の上と背中の間にクッションが敷かれていたのは男達の少しばかりの優しさだった。

シェーバーが股間に押し当てられた時、巴は観念して硬く目を閉ざした。

予想に反して、その道具から激痛を発する事は無かった。

ただジーと言う音と振動が秘裂に不思議な感触を与えた。

大石の背に仰向けにきつく縛り上げられて身体を全く動かせない状態だったが、頭を上げて男達の作業を見詰めた。

成長した女の象徴として豊かに生い茂っていた下草が、男の手にする道具が肌の上を左右する度に失われて行った。

木曾義仲の最も信頼する女武者として周囲の信頼と忠誠を一身に集めていた自分をかくも愚弄する男達に怒りを覚え、まるで童女のその部分の様にむき上げられていく恥ずかしさも込み上げて来た。

そんな怒りと敗北感と羞恥が絹交ぜになった心の内にシェーバーの電動音と振動が不思議な感覚を植えて行った。

「そら出来たぞ！」

秘裂からシェーバーを除かして、明るい声を上げた。

「ツルツル、ピカピカで綺麗なモンじゃないか！」

剃り跡の青々した秘丘を目にしてはしゃいだ声が上がった。

「どうだ？お前も見てみるか？」と、鏡を手にしてそこの様子を巴に見せ付けた。

一瞬綺麗に剃毛され一切の飾り毛を喪失した自分のその部分を目にしたが、見てはならないモノを見たと顔を伏せた。

「おや？お前随分とデカいクリトリスを持っているじゃ無いか！」

「流石は荒くれ武将を従えて来た男勝りの女だけはあるぜ！」

二人は幼児の男根のような陰核を指さしてゲラゲラ笑い声を上げた。

「ここのデカい女は感度が悪いって言うがどうかな？」

指先を伸ばして突然陰核を摘まみ上げた。

ヒィ！と、うめき声を発して身体を硬化させた。

「中々感度が良さそうじゃ無いか？お前馬に跨って揺られている時、コイツが馬の背に擦られて、一人でよがっていたんじゃないか？」と、笑い声を上げた。

愛する義仲でさえ闇の中でめったに触れて来たことの無い雌芯を嫌らしい指使いで弄ばれイヤイヤと首を左右に振り続けた。

陰核をいじり立てながら根元を覆っていた包皮をむき上げ、亀頭部のような形をした先端を

露出させた。

綺麗なピンク色をした宝石の様な部分をしばし見詰めた後、

「お前はさっき股を広げろと命令した時、さっさと拡げなかつたな・・これからその罰を受けるんだ。これからは僕達の命令には直ぐに服従するんだぜ・・」

と、冷たく言い放つと巴の目の前にスタンガンを見せつけた。先端の電極からはバチバチと火花が散っていた。

森はスタンガンを手にしたまま首から乳房のあいだ、鳩尾から臍周り、下腹へとスタンガンを握る手を滑らせていった。

開け放たれた股間の上で手の動きが止まった時、巴は森の狙いに気付いて全てを諦め瞼を硬く閉じた。

森の手にするスタンガンの電極は過たず剥き出しとなつたクリトリスに押し当てられた。

ギヤー！と猿轡で封じられた喉の奥から悲鳴が上がり、大石の上で巴の身体が何度も飛び跳ねた。森はスタンガンを陰核に押し当てたまま数秒間に渡つて電流を注ぎ続けた。

堪え難い苦痛により巴の身体は石の上で何度も飛び跳ね、最後は白目をむいてボールギャグを噛まされた隙間からは泡が流れ出た。

電撃の刺激は膀胱を著しく緊縮させ、秘奥から一条の激しい放水が始まった。

黄色味を帯びた水は2メートル程飛び放物線を描いて地面をビシャビシャと濡らした。

男達の嘲り笑いを耳にしながら巴の意識は薄れて行った。

ふと生暖かい液体を顔に感じて巴の意識が戻り始めた。

薄っすらと目を開けると、大石の上に仰向けに横たわる巴の顔の左右に立つ男達が服の股の間から男根を突き出し、顔を目掛けて小便を掛けていたのだった！

驚いて見開いた眼にまともに黄色い汚水が流れ込み、強い刺激が目に沁みて顔を左右に激しく振り立て呻き声を上げた。

後ろに束ねた長い黒髪が男達の生暖かい小水で濡れて行くのが分かった。

歴史に残る烈女を便器扱いする征服感に酔いながら、「おや？気が付いたかい？今度から僕たちの命令に逆らつた駄目だよ」と、優しい声を出した。

木曾義仲の軍の中に在り女武将として畏敬の念を集めていた自分がこんなにも慘めな扱いを受けている現実に晒されると、これまで築き上げて来たプライドがガラガラと崩れ落ち、踏みにじられるのを感じて嗚咽した。

「泣かなくても良いじゃ無いか。これから三人で遊べばきっと楽しい気持ちになるよ」と、口にすると白色の巨大なバイブレーターを手に取った。

沁みる目を見開いてバイブレーターを見詰めたがそれが何かは判らなかった。ただ男性器を模した形から女体を責める為の淫具であることは理解出来た。

スイッチをいれるとブーンと不気味な音を発して淫靡に蠢き始めた。

そのまるで命を持っているかの様にクネクネ蠢く棒状の物体を目にして巴の頬が赤く染まり始めた。

その太さや長さは恋しい義仲のモノより遥かに大きかった。

義仲しか男を知らない巴にとって義仲の男が果たして世間一般と比べて大きいのか小さいのか判らなかったが、義仲のモノに慣らされた自分にそのような巨大なモノが突きたてられたら壊れてしまうのではないかと恐怖した。

怯えた色を目に浮かべる巴を無視して、森は鼻歌を歌いながらバイブの先を縄に縊り上げられた乳房に押し当ててマッサージしたり、臍の窪みに押し当てて悲鳴を上げさせるなどの悪さをした。

そして、身体の中心線をなぞって柔らかな下腹を先端で愛撫した。

最早その気味の悪い音と動きをする淫具が男達の目指す淫門まで後僅かであることを自覚した。

厳重に縛り上げられ股間を剥き出しにされ、猿轡までされて自害も封じられた今の自分には、最早どうにもならないと覚悟すると、

「ああ・・義仲様！お許しください！」

と、ボールギャグの下で声にならない声を上げて愛しい義仲に心の中で詫びた。

ところが、巴が悲しい覚悟を決めた瞬間、バイブはフッと中心を逸れて開け広げられた太股を撫った。

雌穴への侵入を免れてホッとした巴であったが、森は巧みな道具使いで右に左に秘園の傍の太股を刺激し、纖細な女の神経が通る部分を執拗に責め上げた。

これに呼応するように、林も両手で縄に縊り上げられ前に突き出した乳房を握り締め、せつせと揉み上げ、先端の乳首を交互に舌先で転がした。

乳房を責める林と下腿を責める森の動きが巴の中で一つに繋がり、奇妙な感情が沸き上がりつつあった。

義仲により女の喜びを教え込まれた肉体は、異常な状況下にあってもそれを不思議な快美感

として捉え始めていた。

大石に固定された全身を紅潮させ、興奮に鼻を膨らませて忙しない息を吐く巴の姿を見て感じ始めている事が分った。

林は左右の乳房を半分ほど口の中に含み、興奮にシコリ始めた乳首を口の中で舌先で転がした。

森もバイブの先端で下半身の快感ゾーンを責め立てた。

「ああ・・早く欲しい・・それが欲しい・・」

今まで義仲に心の中で詫び続けていた巴であったが、成熟した女の本性はそれを裏切るように悪魔の囁きを始めていた。

すっかり剃毛され剥き出しとなった秘園がじっとりと湿り気を帯びて来たことが分かった。

突然巴がピクッと身体を蠢かせた。

森が指先を濡れそぼつ肉穴に埋没させたのだった。

「随分濡れているじゃ無いか・・早くこれが欲しいんだろ？」

雌穴を長い指で責め立てられながら否定するように激しく顔を左右に振った。

「嘘を言っても駄目だよ、こんなに濡れているじゃ無いか・・」

愛液が塗され濡れ光る指を巴の目の前に突き出した。

一本の指を二本に増やして中を搔きまわした。華洞に溜まっていた豊富な愛液がドロリと会陰に流れ落ちた。

しばらくの間指先で温かく湿った、そして指を締め付けて来る極上の内部を堪能した。

指先だけでは叶えられない肉の喜びを待ち焦がれるようにもどかしく身体を震えさせた。

今や巴の女陰からは夥しい樹液が流れ出て股間を濡らしていた。

「お待ちどう様・・それじゃ入れてあげるよ」

バイブの先端を肉洞の入り口に押し当てた。

「これでやっと待ち焦がれていたモノが食い絞められる！義仲様に申し訳ない！あんな大きな物が自分の中に入るのだろうか？早く女の喜びにひとりたい！・・」様々な思いが一機に駆け上がって来て戦慄めいたものを感じた。

太いバイブが不気味に振動しながら細い肉洞を押し広げて入って来る時、目の前には明るい星が飛び交い、ゾクゾクとする快美感が心臓を絞め上げた。

ズブズブと野太いバイブを下腹の中に突き立てながら、「どうだ？良いだろう？」と問い合わせた。

バイブの振動と併せるように下腹をブルブルと震わせながら、何かに憑かれたように首を激しく縦に振り続ける巴が居た。

長いバイブが子宮頸部に当たって侵入が止まった。

暫くバイブの太さと長さを味合わせた後、ゆっくりとバイブを前後に動かし始めた。

その優しい長いストロークに巴の快感は一層昂じて行った。

林もそれに呼応して左右の乳房を優しく責め立て快美の淵に誘った。

興奮で全身を真っ赤に紅潮させ、甘い汗臭を立ち昇らせながら、淫具の前後の動きと併せるようにフーフーと荒い息を吐くようになっていた。

バイブを操作しながら最早この女にはまともな考えは残っておらず、頭の中は性的快感で一杯だらうと想像した。

このまま巴を一機に頂上に押し上げるように責め具の動きを激しくした。

林も調子を併せて乳房を激しく責め立てた。

二人の男から責め立てられハアハアと息継ぎが荒く短くなっていた。ビクビクとする腰の動きのその間隔が短くなって来た。

二人は、この女はもう直ぐイクと感じていた。

最後の追い込みに向かって二人は一層激しく責め上げた。

突然、イッ！というような呻き声を咽の奥から出すと巴の身体が激しく硬直した。

そして、次第に硬直は解け沈み込むように弓反りになった身体が軟化して行った。

最早舌を噛んで死ぬ気も起きないだらうと、巴の口を封じていたボールギャグを取り去った。

「どうだ？ イッたのか？」

「はい・・」

目を薄っすらと閉じ顔を横に向けたまま恥じらうように小さな声で応えた。

その貌には甘美な頂点を迎えた至福の表情が浮かんでいた。

この男勝りの女から溢れるような女の色香が立ち昇るのを感じた。

「どうだ？ 良かったか？」

「はい・・」

義仲との交合は愛のある交合であったが、若い女体が真から燃え上がるような交合では無かった。

そして、今この謎の二人の男から与えられた交合は愛は無いが、熟れた女体が燃え尽きるような激しい交合であることを思い知らされた。義仲には申し訳ないが、義仲と閨を共にして

心は満たされても自分の肉体は満たされていなかつた一と、今思い知らされた。

「この二人はこの世のものではない！恐らく天から降りて来た雷神の化身であろう、それならこの二人に身を任せても義仲を裏切ることにはならない・・」と、心の中で都合良く自分の不貞を良い訳した。

今が鎌倉勢との雌雄を決する合戦の最中であることも忘れ果てていた。

そしてもう一度この身がバラバラになるまで、燃え尽きるまであの目眩めく肉欲に浸りたい一と悪魔じみた願望が込み上げて来た。

「それじゃ次にお前の身体を貰うぞ。お前を孕ましてやる」

「はい・・」

この男達がこの世の者で無いならこの身を抱かせても義仲を裏切つた事にはならない一と都合良く解釈して男達に従つた。肉欲への期待感が高まり股間がジワジワと濡れるのを感じた。二人は巴の身体を大石から退かせると、クッションシートを河原に敷き直し、その上に裸身を横たえさせた。

まだ両手は背中に高手小手に縛り上げられたままであったが、両脚は自由になつていていた。

森は全裸のまま仰向けに横たわる巴の両足首を両手で掴むと思い切り上に引き上げ、更に左右に押し広げた。剃毛されて剥き出しとなつた可憐な秘園が森の眼前に広がつた。

森はギラギラする淫靡な目でその部分に視線を注いだ。

男の熱い視線をその部分に感じ、明るいひるひなた日向に男の目に剥き身にされた秘部を晒す羞恥に身悶えた。男勝りの巴なら痩せぎすの森の手を振り解き蹴倒すことは簡単に見えたが抵抗する素振りは伺えなかつた。

男の目に秘部を晒す羞恥が逆に不可思議な快美感となつて巴の正常な思考を蝕んで行つた。

ひい！突然巴が悲鳴を上げて身体を仰け反らせた。

森が両手で巴の脚を掴み全開にしたまま、その中心に顔を押し当てたのだった。

この時代衛生上の理由で男性が女性器を舌で愛撫するという習慣は無かつた。

突然の衝撃に巴の目の前に火花が散つた。

森は衝撃と羞恥にバタつかせる巴の両足首を握り締めたまま顔面を秘園に押し当て、舌を使って愛撫した。

女の性感帯を研究し抜いた丁寧な舌先の動きに巴は声を上げることも出来ずブルブルと身体を震わせた。

肉洞に舌先を差し入れ、ドクドクと溢れ出る花蜜を昇き出した。

生まれて初めて味合わされるクンニリングスの衝撃に巴の目は裏返りオーッ！オーッ！と言葉にならない呻き声を繰り返した。

やがて下腹がブルブルと震え出し、熱いほとぼりをドッと森の顔に浴びせかけるとそのまま絶頂に達してしまった。

「何だ・・またイッたのか・・しょうがないな・・」

巴の愛液に濡れた顔を拭いながら仰向けに倒れ伏す巴の上に身体を預けて行った。

森の男性自身は興奮で最大限硬直していた。

「ああ・・入って来る・・雷神様のモノが入って来る・・」

絶頂を極め薄い意識の底で呻くように口にした。

これまで木曾義仲しか味わったことの無い猛女であり絶世の美女でもある巴の秘奥を自分の分身で堪能した。

甘美な肉の祠に詣でたまま抜き出すことなく何度も体位を変えて楽しんだ。痩せぎすの森であったが、意外にもその部分は太く長かったので突き立てたままの体位変更は容易であった。

流石に変態を自認するだけあって性技に関してはその体力も優れていた。

森に肉洞を捧げたまま、途中何度も巴は昇天した。

森と激しく交接を繰り広げる巴の姿をじっと見つめる林に気付いた。

正常位から姿勢を代え、自分が下になって巴を腹の上に載せたまま、林を手招きました。

女の尻穴に目が無いことを知っていたので、三人で楽しもうという算段であった。

森から手招きされて小躍りするようにやって来た。

深々と森のモノを受け入れる膣孔の僅か上で菊花が柔らかく咲いているのが目に入った。

森からの長い交接により膣の筋肉と繋がる肛門括約筋も柔らかくほぐされされているのが分った。

女との肛門性交に目が無い林は、ぷっくりと肉を置き、痔や変形の無い綺麗な円を描く、巴のその部分が美味しそうに映った。

休みなく長時間森から抱かれ続け息息奄々の巴の後口に亀頭の先端を当てがった。

「アアッ！そこは違う！止めて！」

森との長い交接で意識が朦朧としていた巴であったが林の狼藉に完全に意識を取り戻した。

そして、林の狙いを知って巴が悲痛な声を上げた。

侍が戦場で男同士で尻穴を使って慰め合う習慣は知っていたが、女の身で肛門を犯されるなど考えるのも汚らわしい屈辱以外の何物でも無かった。

「良いじゃ無いか。三人で楽しもうぜ！」

巴の狼狽ぶりも無視して肛門の中心に先端を押し当てたまま腰にグッと力を込めた。

未体験の激痛に悲鳴を上げ、後ろ手に縛られた手を藻搔かせた。

「やっぱりそのままは無理か？ しようがないな・・」

先端を少し突き入れられただけで身体を離したので、ほっとした表情を浮かべた。

しかし、手に何かを持って再び近寄って来た林の表情にゾッとするものを感じた。

林が手にしていたのは催淫剤入りの潤滑クリームであった。

チューブから指先にたっぷりとクリームを絞り出すと、指を肛口に押し当てた。

そして菊花の皺を一本一本伸ばす様に丹念に塗り込み始めた。

不潔な部分を男の指で撫で廻される不快感に腰を揺すって避けようとしたが、下から差し込まれた森のイチモツにより動きを封じられた。

クリームが切れると又新たにチューブから絞り出した。

クリームを塗されて巴の肛口はテカテカと光っていた。

最初はひんやりとした感じのクリームであったがジワジワと熱を帯び始めて来るのが分った。

それと共にむず痒さも込み上げて來た。

「中にも塗り込んでおかないとな・・」

再び催淫クリームを指先に掬うと、ズブリと菊花の中心を割って腸内に指を差し入れた。

森に膣孔を責め立てられ柔らかく弛緩していた肛門括約筋は大人の指くらいは易々と受け入れた。

「イヤーッ！」直腸内にまで指を突き立てられ悲鳴を上げた。

「ここにも良く塗り込んでおいてやるぜ・・」と直腸の内壁にマッサージするようにクリームを塗り込んだ。

「おいおい！ マッサージするのは良いが俺まで変な気分になって來たぜ！」

膣と直腸を隔てる薄い隔壁を通して、クリームを塗り込む指先に膣内に埋め込まれた森の肉塊を感じ取った。

薄い革一枚を隔てて、森の肉茎の表面をなぞるようにクリームを塗り込んだ。

「さあ、尻の穴が熱く火照って来ろう？ 痒くって仕方ないんじゃない？ 今これで搔きまわしてやるからな！」

と、股の間から淫茎を隆々と屹立させながら再び巴に迫った。

「ああ・・熱い・・痒い・・許して・・」

明らかに身体の変調に気付いていたが、肛門で男のモノを受け入れる屈辱に耐えられぬよう拒絶するよう腰を振った。

そんな巴の拒絶を封じるようにしたから森が豊かに張った巴の尻を支え、両手で尻たぶを割った。

明るい日の光の中でセピア色の肛口が剥き出しとなった。

喜び勇んだ林が再び先端を押し当たた。

潤滑クリームは塗られていたが、初めての肛門性交で更に前の孔は別の男に占有されている状況では挿入は容易でなかった。

「ふう・・きついぜ・・」

腰に力を込め亀頭部分が半分ほど埋没していた。しかし、その後の鰓の張った最も太くなる部分の通過は容易では無かった。

巴は前の穴を森に貫通されている状況で更に後ろの孔も抉られようとしている状況に最早悲鳴を上げることも出来ず歯をカチカチと噛み鳴らして耐えていた。

激痛に汗が滲み出て、下に横たわる森の身体の上にポタポタと滴らせていた。

「後少しだ！」

激痛に苦悶する巴の肛門が最大限に開いて、最も太くなる部分を受け入れようとしていた。

「おお！入ったぞ！」

林が歓声を上げた。

最難関を通過して後は力のままにズルッと根元まで腸内に埋め込まれた。

二本の男のモノが体内に埋め込まれた事を感じて悲鳴を上げて身体を悶えさせた。

二人の男に前後からサンドウィッチにされ悶え狂った。

そんな巴の様子を観察しながら上下からピストン運動を繰り返し、何度も絶頂に追い上げた。この時代まだサドとかマゾの概念は無かったが、巴は男達から虐待を受ければ受けるほど、不可思議な被虐の情念が燃え上がって行くのを感じ始めていた。

男二人から受ける被虐の苦痛が早く終われば良いと思うのと同時に、この虐待が自分の心臓が止まるまで続いて欲しいと念じる心が勝り始めていた。

完全にマゾヒズムの虜となって抵抗の意志も失い、自ら被虐の淵に身を投じてしまった巴は、今は緊縛も解かれ、胡坐をかく森の上に後ろ向きとなって腰を預け、肛門を使わせていた。

人並外れたモノで尻穴を貫きながら、後ろから両手を前に廻し豊かな乳房をユサユサと揉み上げていた。

両手の自由を取り戻した巴は、更に強い快美感を得ようと、開け放たれた自らの股間に指を伸ばし、ピチャピチャと音をさせて秘園を搔きまわしていた。

時折、森は巴の顎に手を掛け自分の方に振り向かせると、その唇を奪った。

互いの舌を絡め合う、その長くて濃密な口吻は愛する男女を感じさせた。

林が服の間からイチモツを取り出し、巴の前に突き出した。

この時代フェラチオの習慣は無く、森との肛門セックスの快感に浸り呆けた表情を浮かべていた巴は、しばらくの間不思議なモノを見るようにボーッと見詰めていたが、自然の動作で舌を伸ばし、林の差し出したモノに愛撫を加え始めた。

本能的にそうすれば男が喜ぶのだろうと感じたのか、自由な両手で林のモノを捧げ持ち、亀頭部をなぞり、垂れ袋を優しく揉み始めた。

「そうだ！良いぞ！舌先で裏筋も嘗めるのだ！」

絶世の美女の女武将の絶妙なサービスを受けながら逐一指示した。

「口を開けて俺のモノを口の中で洗うのだ！」

肉茎を根元まで口内に突き立てられ、息が詰まり目を白黒させる巴であったが、得体の知れぬ甘美な情念に突き動かされ、激しく舌先を動かし林のモノを揉み上げた。

初めてとは思えぬ巴の濃密な口技を受けて、流石の林もウーンと唸った。

この女は生まれつき娼婦の才能があると思った。

巴の絶妙な口技に接して、抑えも効かず腰をビクビクと痙攣させると口の中に放出した。

「俺の精を残らず飲み下すのだ！」

フェラチオの無い時代で、当然口内射精も飲精も無い時代であったが、巴は喉を上下させて口の中に溜まった精液を必死になって飲み下した。

「そうだ！尿道に残った精液も吸い上げるのだ！」

林に命じられた通りに頬を窄めて必死に吸い取り、後始末を完了させた。

林のモノを離し、ハッと思をした口の端から白い液が滴っていた。

後ろからその様子を見ていた森も巴の妖艶な姿に魅せられたように腸内に大量の精液を放出した。

しかし、若い男の硬化した肉塊が腸内で萎える事は無かった。

その頃、乱戦の中で遊軍と化した義仲の兵が偶然そこに辿り着いていた。

目の前で素っ裸に剥かれ尻を犯されながら、口で男のモノを咥える巴の姿に肝を潰した。

「アアッ！巴様じや！」

「お勞しや！何と哀れなお姿じや！」

呆然として身動きも出来ず暫しその姿を見守ったが、誰かが「巴様をお救いするのじや！」

と声を上げると金縛りが解けたように、巴を救出しようと一斉に動き出した。

その様子に気付いた林が、「おいおい！大変な事になって来たぜ！」と、怯えた声を上げた。

林の狼狽ぶりを無視して森は悠然と巴とのアナルセックスに浸っていた。

巴もふと味方の兵がこちらに向かって来る様子が目に入り、明るい陽光の中で全裸のまま男と浅ましい交合をしていた恥ずかしい姿を日頃見知っている配下の侍に見られたという衝撃が巴を打ちのめした。

引き攣った悲鳴を上げ、貌はすっかり蒼褪め、必死に自由な両手で胸と股間を隠そうとした。

雄叫びを上げて侍の一群がこちらに向かって来ていた。

「おいおい！早く逃げないと命が無いぜ！」林が悲鳴の様な声を上げた。

義仲の兵の一群は10メートルと離れていない所まで迫っていた。

「大丈夫だって・・」

狼狽える林を醒めた目で見返した。

敵は既に5メートルと離れていない所まで来ていた。

後コンマ数秒の内には、彼らが雪崩れ込んで来て自分の首は昇き取られてしまう・・こんな所に来るんじやなかった！ーと後悔の念が浮かんだ。

所が後僅かに迫っているのに、彼らが攻め込んで来る様子が無かった。

敵が脚を止めた訳では無い！彼らは必死になって全速でこちらに向かっている様子が見えた。

「おい！一体どうなっているんだ？」

「その答えは、だな・・」

森が勿体ぶった言い方で答えた。

「我々は今、異次元空間に居る・・現実の三次元空間に四次元空間を作るため次元を一つ借りて来ている・・そのため境界部分では二次元状態となっている・・二次元、すなわち奥行きの無い平面だ。まるで映画のスクリーンの様にいくらアイツらが攻め寄せて来てもスクリーンから飛び出してくれる事は出来ない。中心から半径5メートル程の領域に境界部分が出

来ている。姿や声は届くが彼らが永久に此処に到達することは出来ない。必死に駆け寄る彼らには判って無いだろうけど、無駄な努力に過ぎない。

森に後ろから尻穴を貫かれている巴には理解することも理解する余裕も無かつただろうけど、自分には何となく理解出来た。

ただ必死に駆け寄ろうとする義仲の軍勢の目の前で、巴を存分にいたぶることが出来ることが分かってサディスティックな情念が込み上げていた。

後ろから森に抱かれる巴も目の前に迫りながらも何時までもやって来ない味方の軍勢を不思議な物を見る様な目で見詰めていた。

これは現実の世界ではなく夢幻の世界なのでは無いかと思い始めた。

夢幻の世界なら自分がどんな恥ずかしい姿を手下の前で晒しても恥ずかしいことは無いーと、思い始めていた。

そして、背後から抉る男のモノが目眩く甘美な世界に再び誘うのを感じていた・・

潤んだ目で後ろを振り向き森の唇を求めた。

森も巴の唇に自分の唇を重ねた。

背後から伸ばした手が、日頃見知っている手下達の前で痴態を晒すことに興奮して、固く勃起した乳首を転がした。

この頃木曾勢の一群もどんなに駆けても一向に距離が縮まらない現実に異変を感じ、速度を緩めていた。

その目の前で、我等が仰ぎ見る女大将が身に一筋の衣も着けず謎の男と睦まじく唇を交わす姿に呆然とした。

どっかりと胡坐を組んで巴を載せ上げていた森が一つに繋がったまま立ち上がった。

巴の両脚を抱え込み背後から深々と突き立てた肉塊で女体を支えて、時々女の体重にふら付きながら境界まで歩み寄った。

「おい、境界まで寄ったらどうなるんだ？」

林が不安げに尋ねた。

「向こうから見てもこちらは映画のスクリーンの様に二次元状態にしか見えない。紙と紙を重ね合わせても文字が移らないように、指を伸ばせば届く距離でも互いに触れ合う事は出来ない・・」

背後から乳房を揉みしだき、肛孔を貫いたまま、啞然と立ち竦む木曾勢の目前まで連れて行った。

まさに指を伸ばせば届く距離であった。

「アアーッ！巴様！」

直ぐ眼前に男から犯される巴の姿を見て悲痛な叫びが上がった。

手を伸ばせば届く距離なのに、手も足も出せない現実を思い知らされた。

日頃見知っている配下の武将や侍から恥ずかしい姿を見られている事に羞恥を超越した摩訶不思議な陶酔感を覚えた。

蜜壺から溢れ出たサラサラとした樹液が大腿を流れ落ちて行くのが後ろから身体を密着させる森にも分った。

「巴、お前の本当の姿を手下達に見せてやつたらどうだ・・」

「はい・・」

巴は自由な両手を自分の股の付け根に持て行つた。

「見て・・見て・・巴のいやらしい雌の穴を見て・・」

両手の指先を使って、綺麗に剃毛された童女の様な柔肉を左右に押し広げ、濡れそぼった秘園を露わにした。

男達は息をするのも忘れ、血走った目でその部分を凝視した。

男達の熱い視線がそこに集中するのを感じ巴の情念が一層昂き立てられた。

「アアーッ！良いわ！・・・巴は本当はこんなにいやらしい女だったのよ！」

両手の指を雌穴に突き立てピチャピチャと音を立てて淫液を挿い出した。

その様子を男達は啞然とする目で見守った。

中には良く見ようと腰を屈めて下から見上げる男もいた。

巴の両大腿を抱えた森が、男達に見せ付けるように巴の背を胸に載せたまま反り返つた。

逆駆弁体位と言っても良い状態になり、森の肉塊が深々と巴のケツメドを貫いている様子も、巴が自らの指で陰孔を愛撫する様子もありありと映つた。

目の前の巴の裸身に手を触れようと無意識に手を伸ばす男も居たが、決して触ることは出来なかつた。

巴が首を振つて森の唇を求めた。

森も巴を抱え上げたまま唇を重ねた。

肛門性交をしながら自ら前の穴を自慰し、仲睦まじく接吻する巴の姿を啞然として眺め続けた。

「さて、本日最大のお楽しみと行こうか・・」

衆人環視の中で、林が 500cc 容量の巨大なガラス浣腸器を手にはしゃいだ声を上げた。

グリセリンの瓶から出した原液をペットボトルの水で希釀して浣腸液を調合した。

見守る木曾勢もそれが何かは判らなかったが、何か淫靡な準備であることは理解出来た。

「巴、そこに四つん這いになるのだ」

無言で言われるままに河原の上に犬の様に四つん這いの姿勢をとった。

「尻をもっと上に上げるのだ」

「はい・・」

森に命じられるままに屈辱の姿勢をとった。

長時間に渡って林と森から交互に突き立てられていたアヌスは完全に閉じることは忘れ、少し開いたまま赤黒い内部の様子を差し込む日の光に晒していた。

ガバッと尻たぶを押し分け、その様子を観察していた森は、肉の丘の谷間にいじらしく咲く一輪の菊花に魅せられたように顔を押し付け、その中心部を舌先で愛撫した。

突然の肛孔への舌先の攻撃を受け、河原の石に顔を擦り付けたまま悲鳴の様な声を上げてビクビクと身悶えた。

腸内を舌先で搔きまわす森の舌先には独特の香りと味覚が襲ったが、逆にエロスの情念を高めることとなった。

「ああ・・巴様・・」

「お勞しや・・」

犬の様に河原に四つん這いになったまま、まるで獣のように尻穴を嘗め回される巴の姿を凝視して悲痛な声を上げた。

彼らは自己では気づいていなかったが、股間のモノは痛いほど屹立し、中には無意識の内に取り出して擦り始める者もいた。

「それじゃ始めようか」

林が 500cc 容量のガラス浣腸器に浣腸液を満々と満たして歩み寄った。

巨大な硝子浣腸器の嘴管が巴の菊花の中心に突き立てられた。

二人の現代から来た変態男に責められたアヌスは抵抗なく太い嘴管を呑み込んだ。

これから何が始まるのか全く分からず、ただ被虐の情念のまま尻を突き出していた巴であつた。

最初、嘴管を突き立てられた時は男達の巨大な淫茎と比べると、はるかに小さく奇妙な異物感を感じるだけであったが、次に冷たい水が腸内に流れ込んで来た時、得体の知れない恐怖を感じて手を握り締めた。

「さて、一本目終了」

ポンと音をさせて嘴管を引き抜いた。

薄めたグリセリン液だったので直ぐには腸は活動を始めず、なにやら重苦しい膨満感だけが下腹に残った。

「そら、二本目だ」

再び突き立てられた嘴管から冷たい水が流れ込んだ。

まだ腹に痛みは感じなかったが、腸が内部から膨れて行くのを感じた。

二本目を空にすると早速三本目の浣腸器に液を吸い上げた。

「そら、三本目だ」

嘴管を菊花の中心に突き立てると、シリンドラーを押し込み始めた。

まだ腹に異変を感じていなかったが、重苦しい違和感が腹全体を覆うように感じて、「もうお許しください・・」と、浣腸液を注ぎ込まれながら哀願した。

「何を言ってる。若い女ならこんなもの2リットルでも3リットルでも平気なはずだ」と、シレッと返した。

「そら、四本目だ」

都合2リットルの浣腸液を注ぎ込まれて、腹がパンパンに張るような感じがした。

心臓がドクドクと脈打ち脂汗が滲み出していた。

「ほら！五本目行くぞ！」

身悶える巴の姿をサディスティックな目で見詰めながら更に浣腸器を突き立てた。

限界まで膨張した大腸が悲鳴を上げ、更なる浣腸液の流入に抵抗した。

急に重くなったピストンの動きに気が付いた林は更に力を込めて押し込んだ。

「ああー！もう！」

腹が内部から裂けるような圧を感じて、悲鳴を上げた。

巴の腹圧とピストンを押す男の腕力の勝負となっていた。

残り50ccほどになった所で、嘴管と肛孔の隙間から激しく浣腸液が噴き出した。

「やれやれ2400ccで、所か・・しょうがないケツだな・・」

残忍な薄ら笑いを浮かべて嘴管を引き抜き、高く擡げた尻をパンパンと叩いた。

「ああ・・」

突然巴が苦悶の表情を浮かべた。

腸内に注ぎ込まれたグリセリンがその残酷な効果を發揮し始めたのだった。

「ふふ・・効き始めたようだな・・ただ、直ぐに出しては面白くない・・もう少し楽しんで貰おうか・・」

最初は重苦しい違和感に過ぎなかつたものが次第に腸全体を搔き筆る苦痛に代わつて行つた。

河原に四つん這いの姿勢をとつたまま脂汗を流し強烈な腹痛と闘つていた。

最初は腹を搔き筆る腹痛であったが、次第にそれは排泄を求める強いうねりとなつて行くのが分つた。男達から注ぎ込まれた液体が今や濁流となつて出口に殺到していることを思い知らされた。

腹の中の物を出てしまえばこの苦痛から逃れられると感じたが、武家の頂点に君臨する女武将としてのプライドが男達の見守る前で排泄するという汚辱を許さなかつた。

「これはさつきお前が楽しんだバイブだ・・」

巴に死ぬほどの屈辱とかつて経験した事の無い快感に誘つた白いバイブレーターを見せつけた。

「そして、これはお前の尻穴に栓をするバイブだ・・」

少し小振りの黒いバイブレーターを手にして見せつけた。

腹を襲う激しい痛みに苛まれながら、ブルブルと命あるものの様に震える白と黒のバイブレーターを不気味な物を見るように見つめた。

出口を求めて浣腸液とそれに溶かされた腸内汚物が殺到する肛口にズブズブと黒いバイブを埋め込んだ。

その大きさと不気味な刺激に河原の石に顔を擦り付けたまま泣き叫んだ。

黒いバイブレーターを根元まで押し込むと次に白いバイブレーターを淫孔にあてがつた。

境界の外から見守る木曾衆は呆然とその様子を見守つていた。

ピクピクと蠢く二つの秘孔は自ら噴き出した淫靡な液で濡れており、ズブズブと容易に二つの筒具を呑み込んでいった。

その時、木曾勢の残党狩りをする鎌倉勢の和田義盛が配下を引き連れて出現した。

「やや！あれは木曾義仲の愛妾の巴御前ではないか！？」と、大声を上げ、次に異常な状況に目を疑った。

僅かばかりの木曾勢の見守る中で、得体の知れない二人の男から素っ裸にされ狼藉を受ける巴御前？

状況は全く理解不能であったが、コイツらを蹴散らして巴を生け捕りにするのは、赤子の手を捻るようなもんだーと、突然の僥倖に小躍りした。

「それ、義仲の首級は上げたぞ！次は巴を生け捕りにして鎌倉への手土産とするのじゃ！」と、配下の軍勢に大声で呼ばわった。

巴の災難を固唾を呑んで見守っていた木曾勢であったが、突然の和田義盛の出現に現実に引き戻された。

そして、義盛が大音声で発するように、このまま巴を生け捕りにされでは、武士の面目が立たないと得物を手に和田勢に襲い掛かった。

突然の鎌倉勢と木曾勢の戦いが始まったが、森も林も自分には関係ない事ーと平然と巴を責め続けた。

巴にしても激烈に腸を責め苛む苦痛と林が操作する二つのバイブの妖しい刺激に、一体今何が起きているのか理解する理性は完全に喪失していた。

前後の二つの穴に突き立てられたバイブはグルグルと蠢き巴の苦悶を一層促進していた。

「ほら！咥えるんだ！」

巴の長い後ろ髪を掴んだ森が股間から突き出した淫茎を巴の目の前に見せ付けた。

自分で能動的に動いていなければ、直ぐにでも落下無残な醜態を晒してしまいそうだと分っていた巴は、目の前に突き出された隆々とした肉塊に縋るように武者ぶりついた。

「そうだ、お前もおしゃぶりが随分と上手になって来たな・・」

脂汗を流し、苦悶しながら必死にしゃぶり上げる巴を面白そうに揶揄った。

一方林は巴の苦悶を一層大きくするように、尻からまるで角の様に突き出した白と黒のバイブを操った。

境界の外での木曾勢と鎌倉勢の戦いは鎌倉勢の圧勝であった。

木曾勢も死力を尽くして奮戦したが、多勢に無勢、戦勝の勢いに乗る義盛の軍に一方的に蹴散らされてしまった。

巴を生け捕りにせんと、近寄ろうとするがやはり境界に阻まれ何としても近づくことが出来

なかった。

幾ら歩を進めても、ちっとも近寄ることが出来ない状況に困惑していた。

巴の必死の口技によりゴール間近まで追い上げられていた森は異変に気付いた。

映画のスクリーンの様な境界が突然乱れ始めて、テレビの画像が歪むようにピッピッピッと歪始めた。

そして、何やら奇妙な波動を肌に感じるようになった。

「拙いな林！異次元空間を維持するのも限界に来たようだ！帰るぞ！」

「チエ！折角良い処で！」

巴の尻を責めながら残念そうに舌打ちをした。

巴の口から硬直した肉塊を引き抜いた。

途中でお預けをくらったように巴が残念な表情を浮かべた。

引き抜いた男根から夥しい精液を噴き出して、巴の顔に吹きかけた。

ネバネバする白い精液を顔面一杯に受け、巴の顔に至福の表情が浮んだ。

二人の姿が陽炎の様に薄くなって行った。

それと同時に境界が崩壊し始め、和田義盛を先頭に鎌倉勢が巴の下に殺到した。

「これは、これは、巴殿。何とも人前に晒すことが出来ないようなお姿では無いか。

四つん這いの姿勢をとる巴の尻の前にどかっと腰を降ろした義盛が淫猥な笑い声を発した。

義盛の発する言葉は巴の羞恥をかき揚げたが、少しでも気を緩めれば、すぐにでも暴発してしまいそうな状況に苦痛で尻を痙攣させながら同じ姿勢を取り続けるしか無かった。

「これは巴殿のお気に入りの嫁入り道具で御座るか？いやいや何とも卑猥な形をしておりますな！」

白いバイブを音をさせて抜き取り愛液に濡れる淫具を繁々と見つめた。

「おやおや？オ [REDACTED] だけではなく、こんな所にも・・」

浣腸などの知識も無く、脂汗を流し、尻を痙攣させている巴の苦悶の原因が排泄を耐えている事も知らぬ義盛は、肛口の皺を精一杯伸ばして食い込む黒いバイブに手を掛けた。

それを引き抜かれたらどんな恐ろしい事が起きるか巴には判っていたが、歯を固く食いしばり限界を堪える巴には、声を上げることも出来ず、激しく頭を振って身を揺すって拒絶するしか無かった。

「おお・・中々固く御座るな・・」

肛門括約筋の全力を尽くして食い絞める淫具に難渋しながらも、力を込めて引き抜いた。

その瞬間、開ききった肛孔からドロドロに溶けた便塊の混じった夥しい汚水が噴き出し、義盛の顔を襲った。

薄れゆく景色の中でその状況を見ていた林が「なあ、この後どうなるんだ?」と、森に尋ねた。

「武士の面体に糞を浴びせかけられた和田義盛は激怒して、巴を鎌倉の自分の屋敷に連れ帰り、その恨みを晴らすために、一生性奴隸として飼い続けることになるのさ・・まあ、巴も心の奥底に秘められていた被虐願望を呼び覚まされ、マゾの喜びを知るようになったし、性奴隸に墜ちて毎日虐待を受ける方が幸せかも知れんな・・」

「おい、それは本当の歴史か?」

自分達が過去に遡ってその後の歴史を変えてしまったのでは無いかと心配そうに尋ねた。

「なあに、歴史なんざ後の人間が自分の都合の良いように適当に解釈したもんだから、何も問題は無いさ・・」

1558年 ロンドン塔

「おい、随分ジメジメして徽臭い所だな!」

林が灯りのほとんどない薄暗闇に包まれた湿っぽい石造りの通路を懐中電灯の明かりを頼りに歩きながら呟く様に言った。

「此処はロンドン塔の地下のダンジョンだ。政治犯や王国に危険を及ぼす囚人が収監されている・・此処に今回の僕達の遊びに付き合ってくれる女が居る・・」

「いったい誰が居るんだ?」

「英国王室に繋がる高貴な女さ・・しかし、その誕生も現在の境遇も非常に複雑だ・・

彼女の父はイングランド国王のヘンリー8世、母はアン・ブーリン。しかし、このヘンリー8世という男は大変多情な男で、次々と愛人を作つては王妃にしたがる。しかし、当時のイングランドはカソリック教を国教としており、カソリックの総本山のローマ教皇は離婚を許さない。そこでヘンリー8世は新たな王妃を迎えるため、アン・ブーリンに不義の罪をでつ

ち上げ、刑死させて、彼女を庶民の子に落としてしまった・・」灯りの無い暗い通路を連れ立って歩きながら森が説明した。

「殺されたダイアナみたいだな・・」

「彼女の死は事故か事件か知らないが、この頃のイングランドではこのような血生臭い事件は度々起こっている。そして、この事がイングランドの国教をカソリックから新教に代える原因となった・・」

歩を進めながら、ダンジョンの闇は益々深くなつて行くように感じられた。

「こんな王様だから幾人も取り換えた王妃との間に何人かの子がいたが、男の子は一人しかおらず、当然その子が王位を継承するのだが、若くして死んでしまった。女の子は何人かいが、国民の人気も高く有力なのはメアリーとエリザベスだった。メアリーは女王として即位したが、当然エリザベスの事を警戒している。エリザベスを女王に押す反乱が起きたのを奇貨として、エリザベスに反乱の首謀者の容疑を着せ、ここロンドン塔に幽閉してしまったという訳だ」

このダンジョンの闇が深いように王室の闇も深いモノだと話を聞きながら林は感じていた。

「それじゃ、これから会いに行くのは、そのエリザベスか？」

林の問い合わせに森は黙って肯いた。

「このエリザベスという女は気丈な女で、どんな尋問一まあ、拷問だな一を受けても決して自分に不利となることは自白しなかった。この前の巴御前が潜在的に被虐願望を持っていたのとは好対照だ・・」

「それじゃ、責めるのに骨が折れそうだな？」

「なに、強い女の方が責め甲斐が在るってもんだ」

此処だと、とある牢舎の前で足を止めた。

頑丈なぶ厚い木の扉には覗き窓が在ったので、林が覗き込んだが暗くて中の様子は良く判らなかった。

森が細くて短い金属棒を取り出して、扉を止めていた南京錠の鍵穴に挿してガチャガチャと始めた。

「おい、鍵を外せるのか？」

「こんな原始的な構造の鍵など外すのは難しくない」

「こんな事をしていて見張りがやって来ないか？」

林が心配そうにたずねた・

「女王メアリーは現在重い病の床だ。メアリーが死ねば次はエリザベスが女王になる可能性が高い・・最初の内はメアリーの意を受けて激しく尋問一まあ拷問をしていた審問官もメアリーがこのまま死ぬか回復するか様子眺めで、牢番も自分に災難がおよぶのを恐れて牢にやって来ることは無い。牢番が来るのは食べ物を運ぶ時だけだ・・ほら、出来た」

ガチャリと錠前が開く音がした。

門を外して重い扉を引いた。

ギシギシと音を立てながら分厚い扉が開いていく。中は灯りが燈されておらず漆黒の闇であった。

プゥーンと餓えた臭が鼻を衝いた。

懐中電灯の光芒の中に、石の床の上に積み上げられた藁の上にボロ布の様な衣類を身に纏つただけで横たわる女の姿が照らし出された。

明るい光に直射されて、流石に目を醒ました若い白人女が眩しそうに手で目を覆いながら、牢番や審問官とは様子の違う二人の男に気付いて「誰？」と、声を上げた。

その怯えを含んだ、しかし王族に生まれた女としての毅然とした声は、耳にはめ込んだイヤホンに自動翻訳機を通して流れ込んだ。

「心配しなくていい、ちょっとこれから遊ぼうと言うだけだ・・」

森の声が翻訳機から古風な英語となって流れた。

二人は状況が理解できず困惑するエリザベスの傍に歩み寄った。

森が手をさし寄せてエリザベスの手を握ろうとしたが、怯えた彼女は咄嗟に手を引っ込めた。しかし、何が起きているか判らず困惑する女はそれ以上の抵抗の素振りは見せなかつた。

「しかし、酷い臭いだな・・この間の巴の比じゃないな・・」

林がエリザベスの身体から立ち昇る悪臭に眉を顰めながら呟いた。

「ああ、日本は綺麗な水が豊富だったから毎日身体を洗う事が出来た。ただ今のようにボディシャンプーなんか無かったから陰部を綺麗に洗うことが出来ず臭ったが、ヨーロッパは元々綺麗な水が少なく、その上長期の牢獄暮らしだから、確に身体を洗っていない。」

ボロ布の様な衣類から露出した垢じみた肌を見ながら言った。

「俺も身体を洗う前の女の体臭は好きだが、流石にこれじゃな・・」

懐中電灯で垢と埃に塗れたエリザベスの身体を照らしながら辟易とした声で呟いた。

「そうだ！俺に良い考えがある！」林が突然思いついたように手をポンと叩いた。

時は変わって現代・・ここはとある鄙びたソープランド

「さてと、次の予約のお客様はと・・何だ、林さんか・・」

ソープ嬢の朱美が本日の予約表を捲りながら呟いた。

「おう！朱美、世話になるぜ」

林が森とエリザベスを連れてノコノコと入り込んで来た。

森に肩を預けたまま立ち尽くすエリザベスは 16 世紀のイングランドと余りにも違う周囲の状況に自分の置かれている事態が全く理解できず、無言のまま目をキョロキョロさせていた。

「何？！その汚い女は？何処で拾って来たの？」

垢に塗れた外人女を目にして驚いて声を上げた。

「おう！御覧の通り外見は汚れているが、洗えば中々の美人だ！綺麗に洗って貰おうと思って連れて来たんだ」

「ちょっと！此処は身体を洗うお風呂じゃないんだよ！」

「そんな事分かっているさ！朱美！お前、男より女の方が好きな事知っているんだぜ！お前の為に連れて来てやったんだ、有難く思え！」

林の言葉に興味を覚えたのか、亜麻色の髪を持った若い外人女の身体を上から下まで讃め回す様に眺めた。

「ふーん・・良いけど、お代は三人分キッチリ頂くよ！」

「ケッ！がっちりしているぜ！」

朱美がエリザベスの手を取って浴槽の方に誘った。

裸体の上に羽織っていたガウンをするりと脱ぎ捨てると、むっちりと肉感的な身体が現れた。森も林も朱美のたわわに実った乳房やキュッとしまったウェストや豊かに張った腰回りの股間の付け根に視線が集中した。

ムダ毛を処理しているためか、元々薄い体质なのか股間を覆う春草の上からくっきりとした肉の割れ目が透けて見えた。

先に自分が全裸になると、次にエリザベスの粗末な囚衣を優しく脱がしていった。

エリザベスはこの女が自分に湯あみをさせる奴隸女の下女だと想像した。

これまでの展開は彼女にとってあまりにも理解を超越するものであった。この女にしても男

二人にしても自分と同じ白色人種で無いことは明らかであり、海外で捕えて来た奴隸がロン
ドン塔のダンジョンから釈放された自分を迎えて来たのだろうと想像していた。

下女が相手なら裸身を晒しても恥じることは無い。貴族の家で育てられた鷹揚さで大人しく
朱美のするままに任せていた。

森と林の二人も自分の世話をするための奴隸の下僕だと思っていた。相手が奴隸なら人間で
は無く家畜と同じだから、犬や馬の前で裸になるようなもので羞恥は無いと感じていた。

囚衣を脱がされたエリザベスの身体は、やはりその下に何も着けておらず、たちまち白い裸
体が現われた。

長い虜囚生活で栄養が不足していたため、肌の色艶も悪く、やせ細っているが、現在の高カ
ロリーな食べ物を与えれば、肌もしっとりと滑らかになり、胸も大きくなるだろうと、二人
の様子を遠巻きに眺めながら森は想像した。

朱美が手を取ってバスタブの中に立たせるとシャワーの栓をひねった。

暖かなお湯がたちまちエリザベスの身体を包んだ。

常に水が不足していた 16 世紀のヨーロッパの小さな風呂しか知らないエリザベスにとって、
なんて暖かくて肌に優しいお湯だろうと感激した。

鉱物質を沢山含んだ肌がゴワゴワとするような母国の硬水と違って、柔らかな軟水が肌に心
地よかったです。

お湯が掛けられる度に身体にこびり付いていた垢が削げ落ち、排水溝に流れ落ちて行った。

朱美の手で、髪を洗われ、全身を洗われると生まれて一度も鼻にしたことの無い甘美なシャ
ンプーの芳香に包まれ、これまでの疲れがどっと出るような安堵感と至福感を感じていた。

白人女らしい透けるような肌の白さが見詰める男達の目に映った。日に焼けたどちらかと言
うと浅黒い朱美の肌とは好対照だと思った。

全身の汚れを洗い流すと大きなバスタブにお湯を満たし始めた。

心地良いお湯に浸りながら、朱美はエリザベスの身体に自分の身体を摺り寄せた。

久しぶりに全身を清め、いやそれ以上にこれまでの人生で経験した事が無い 21 世紀の風呂
に浸り、その心地良さにまるで桃源郷に居る様に意識が遊んでいたエリザベスにとって朱美
が肌を摺り寄せて来たことに意識は無かった。

そっと手を伸ばして夢見心地のエリザベスの身体を優しい指使いで摩った。

温かい気持ちの良い湯の中で陶酔感に浸っているエリザベスにとって、全身を這い回る下女
(エリザベスは、まだ朱美の事を植民地から連れて来た自分に奉仕するための奴隸女だと思

っていた）の指先は不快な物では無かった。いやそれ以上に朱美の巧妙な指使いはエリザベスの多好感を搔き揚げた。

いつしかお湯の中で二人は身体を密着させ合い、後ろからエリザベスの身体を支える朱美の手は乳房や股の付け根に伸びていた。

エリザベスの口から甘い溜息が漏れ始めていた。

「流石にレズビアンだけあって旨いものだ」

透き通るように白かったエリザベスの身体がやがてピンク色に染まっていくのは単にお湯で身体が温められ火照って行くだけでは無いことを男達は気付いていた。

森達は遠巻きに二人の女が甘美な息を吐きながら身体を擦り合わせる様子を眺めていた。

背後からエリザベスの身体を抱き締める朱美は上気した頬に自分の頬をクネクネと摺り寄せた。

最初は湯浴みの手伝いをする下女と思っていた女から手足や背中を洗われるだけでなく敏感な乳房や自分の大事な個所をまさぐられることに当惑と嫌悪の表情を浮かべる事もあったが、何時の間にか朱美の巧妙なリードにより秘められていた女の性本能を引き釣り出されて行つた。

頬に指を寄せて自分の方を振り向かせると、薄っすらと開い唇に自分の唇を摺り寄せ、柔らかな唇で相手の唇の肉を摩り、伸ばした舌先で嘗めた。

薄く瞼を閉ざしたエリザベスは、ほの赤く染まった貌で朱美の唇を受け止め、互いに唇を密着させたまま、朱美の舌先を迎え入れた。

この二人の女の口吻姿に男達はホウと感心して声を上げた。

エリザベスの手を取ってバスタブから引き揚げた朱美は床に敷かれたエアマットの上に横たえさせた。

女同士の愛の営みに陶酔するエリザベスは朱美に導かれるままエアマットの上に仰向けに横たわった。

しどけなく開いた股の奥に栗色の春草で縁取られた可憐な乙女の源泉が垣間見え、男達の視線を釘付けにした。

「これが、女王様になる女のオ [REDACTED] か・・」

林が唇の端から涎を垂らしながら呟いた。

エリザベスの横に正座した朱美がローションの瓶を取り、自分の掌に垂らした。

両掌にたっぷりとローションを塗して、エリザベスの身体を撫でた。

そのヌルっとした妖しい感触に小さな悲鳴が上がり、ピクッと身体が震えた。

ピクピクと痙攣するエリザベスの様子を楽しむように、ヌルヌルする掌で全身を撫でまわし、更にローションの瓶を傾けて直接裸身の上に降り掛けた。

エアマットの上でローションに塗れたエリザベスの裸身が、艶々と照り輝いていた。

柔らかな腹の上に滴り落ちたローションを掬い取って、両掌でエリザベスの両乳房を揉み上げた。その脳髄を直撃するような痛切に込み上げる快美感に、エリザベスの口からヒッヒッと短い悲鳴が何度も上がり、断続的に身体が震えた。

揉み上げる朱美の指の間からこぼれた乳首が次第に固くしこって行く様子が映った。

左手で乳房をユサユサと揉みたてながら、右手はそろそろと腹を擦り、次に下腹を愛撫し、春草を優しく撫で上げると、遂に大腿の狭間に達した。

作業がやり易いように股間を押し広げるよう邪険に手で大腿を押すと、今やすっかり朱美に支配されてしまったエリザベスは意図を察したのか自発的に股を開き始めた。

血走った目で見詰める男達の前に、股間を大きく広げた王女の姿が在った。

チラッと男達に視線を送った朱美は、固唾を呑んで見詰める男達に見せ付ける様に、優しい指使いで可憐な肉の花弁を左右に押し広げたので、淫靡な襞に隠されていた女の花園が露わとなつた。

朱美の巧妙な手技により快美感をかき上げられたエリザベスは執拗な指先に敏感に反応しふくビクと腰を振っていた。

込み上げる性感に赤く充血した女の秘壺には甘い蜜が溢れそうに満たされているのが映った。二本の指先をすると肉洞に滑り込ませた時、小さく悲鳴が上がり身体を悶えさせた。

朱美はそんなエリザベスの反応を楽しむように、左手で乳房を揉みしだきながら、右手の指先で内部を掻き立てた。

「どう？良いでしょ？良いっておっしゃい！」

自分の巧みな性技の前に身悶え続けるエリザベスの反応を楽しみながら嵩に掛かった様に責め立てた。

アアッ・アアッと舌足らずの悲鳴を漏らしながら、辛そうに眉を顰め瞼を固く閉じて身悶える女の姿があった。

男達の視線の先で、朱美の指先を深々と呑み込んだエリザベスの秘孔から指の動きに併せて昇き出されるようにピチャピチャと愛液があふれ出していた。

「なるほど・上手いもんだな・」

森が感心したように呟いた。

その間にもエリザベスの鼻に掛かった甘美な悲鳴は益々激しくなってゆき、呼吸は短く激しくなっていった。

ヒーッ！と突然激しい声を発して身体を仰け反らせると、続いてブルブルと身体を痙攣させた。

発作が納まって、やがて体がぐったりと弛緩して行く姿を見詰めながら、「イッたのか？」と尋ねた。

頬に好色な笑みを浮かべながら男達の問い合わせに頷く朱美は、「まだまだよ、これからレスボスの愛の奥深さをたっぷりと教えてあげるわ・・」と、絶頂の余韻に浸る王女の姿を見詰めながら口にした。

朱美はローションの瓶を手にすると自分の胸や腹にドロリとした液体を振掛け始めた。そしてローションに塗れたテカテカと光る裸体をマットの上でぐったりとするエリザベスの上に重ねて行った。

朦朧とする意識の中で温かく柔らかな肉体が自分に覆いかぶさって来るのが判った。

密着した肌と肌の摩擦感がローションによって増幅され、激しい快感となって襲い、僅かに身体を動かすだけでも甘い悲鳴が口をついた。

エリザベスの胸に自分の胸を押し当てゆっくりと身体を上下に動かした。

女同士で乳房を擦り合わせる甘美な刺激にエリザベスの口から甘い声が漏れた。レズの奥儀を駆使する朱美も何時の間にか快感に燃え始め、密着する二人の乳房の先で乳首が硬く尖り始めていた。

二人は硬く隆起した乳首で互いのモノを弾き合った。

豊満な乳房でエリザベスの快感を昂進させながら、下腹を相手の下腹に押し当て淫靡に動かし始めた。

ローションに塗れた互いの痴毛が絡み合った。

快美感に浸るエリザベスの表情を窺いながら、股間を大きく広げさせ自分の秘芯を相手の秘芯に押し当てた。

柔らかな朱美の秘裂を自分の秘裂に感じてウッと声が上がった。

胸で相手を愛撫しながら股間を擦り合わせて愛欲に浸る二人の若い女の姿が男達の目に映った。

性感に燃える互いの雌芯からは愛液が湧き出し、交じり合ってマットの上に滴り落ちた。

クネクネと身体を擦り合わせてエリザベスに甘い悲鳴を上げさせていた朱美は満足して、次に体の向きを変え大きく広げられた相手の股間に頭を持って行き、自分の太股でエリザベスの顔を挟むように体位をとった。

エリザベスの顔面直ぐ上には淫液に塗れた熟れた女陰が在った。

朱美は両手の指先を熱く火照った陰唇にあてがい、優しく左右に押し広げ、繊細な指つかいで、柔らかな肉の襞を押し開けた。

そこには赤く充血した果肉が現われ、神秘の花園の中央に穿たれた秘孔が物欲しげにピクピクと呼吸していた。

魅入られたように王女の秘部を見詰めていた朱美は突然顔をその部分に押し当てた。

突然秘奥に顔を押し当てられ、かって経験の無い衝撃にエリザベスの身体がビクンと撥ねた。エリザベスの反応を無視するように、朱美は舌先を伸ばし秘密の花園の周囲を激しく嘗め回した。

産まれて初めて味合わされた快感が股間から脊髄を津波のように駆け抜けジーンジーンと脳髄を刺激し続けた。

エリザベスの懊惱を表す様に蜜壺からはドクンドクンと愛液が迸り出していた。

その甘美な女蜜を貪るように舌先で絡め取り、更に秘孔の奥に舌を差し入れた。

下女の舌先を自分の肉洞に感じて舌足らずの悲鳴が上がった。

その秘奥から込み上げる痛切な快美感に身体をブルブルと震わせていた王女であったが、その蠱惑的な刺激に身体が慣れて来た頃、目の前に饗された朱美の雌芯に気付いたように、オズオズと手を伸ばしパックリと左右に押し開いた。

突然のエリザベスの反撃に驚いたように朱美の腰がビクンと撥ねた。

頭をもたげ下から朱美の噎せ返るように火照った股間に顔を押し当てると、仕返しをするよう攻撃を始めた。

王女の激しい舌遣いに上に跨る朱美の口からアッアッと悲鳴の様な喘ぎ声が漏れた。

二人は周囲の事などまるで忘却したように、シックスナインの姿勢のまま互いの秘裂を味わいつくした。

朱美の巧みな性技に煽られてエリザベスの秘裂からムクムクと木の芽が屹立して來た。

「こんなモノおっ立てて何が言いたいのよ・・」

と、ほくそ笑むとそれを口に含み優しく舌先で転がした後、軽く甘噛みした。

強烈な刺激にエリザベスの口からヒーッ！と悲鳴が漏れた。

女同士の愛欲に打ち震える二人の姿をじっと見詰める林は、「王女とソープ嬢のレズビアンなんてめったに見れるもんじやないな・・」と、涎を垂らしそうになりながら呟いた。「おっと！この貴重なレズショードを撮っておかないと！」と、慌てて懐からスマホを取り出して二人の淫欲の姿を撮影し始めた。

互いの淫液を貪り合った朱美は、次にエリザベスの身体を裏返し、犬の様に四つん這いの姿勢を取らせた。

長時間のセックスで疲労困憊したのか、エリザベスは気だるげに顔をエアマットに押し当てたまま、尻だけを高く擡げて朱美の方に向けていた。

男達の目にも高く持ち上げた尻の狭間から、愛欲に濡れた女陰とすぐその上に可憐な小菊のような皺を刻む排泄口という女として決して人には見せられない二つの秘部があからさまに映った。

朱美はエリザベスの尻を抱え込むと、その上に開花した白菊にそっと唇を押し当てた。

（アアッ！そんな所イヤ！イヤ！）悲鳴を上げて羞恥に腰を振り立てた。

がっちりとエリザベスの腰を抱え込んだ朱美は必死の抵抗を封じ、菊花の周りを丹念に嘗め回すと更に舌先をその中に差し入れた。

強烈な刺激に襲われ身体を蝦反りに反らした後、一瞬エリザベスの意識が失われた。

エアマットに顔面を押し付けたまま荒い息を吐き続けるエリザベスの姿を見詰めながら「まだまだよ・・これからトドメをさして上げるからね・・」と、冷たく呟く様に言うと、傍らの物入れの引き出しを開いて中をゴソゴソと探して、何やら取り出した。

それは怒張した男性器を模した筒具を取り付けたペニバンと呼ばれる女性同士が楽しむ淫具であった。

「朱美！お前そんな物を持っているのか？」

林が驚いた声を上げた。

「そうよ！此処に来るお客様の中には林さんみたいな変態も沢山来るのよ！中には入れるより入れてもらう方が喜ぶお客様もいるのよ！これで突いてあげると喜ぶわよ！」
と、ペニバンを腰に取り付けながら思い出し笑いするように微笑んだ。

「そうするとこんな太い物をケツの穴に入れる男も居るのか！？かなりの猛者だな！」

黒光りする樹脂で出来た野太いモノを繁々と見詰めた。

「今日のところはお尻の穴じゃなくて、オ█████の穴に入れて上げるわ。初めてのお尻の穴にこんなモノ入れたら裂けてしまうからね」と、悪戯っぽく笑うとその先端をエリザベスの秘所に押し当てた。

グッタリと意識を失っていたエリザベスであったが、剥き出しの秘孔に異様な感触を感じて悲鳴を上げた。

エリザベスの発する悲痛な声を無視して、朱美は腰に力を込めてグッと前に突き出した。

つんざく様な悲鳴とその後の喘ぐような声の中、巨大な筒具の先端が媚肉を押し広げてジワジワと体内にめり込んで行った。

「エリザベス女王ってのは一度も結婚せずに、生涯処女のままだって言うけど・・」

手付かずの処女には巨大すぎるような太い淫具が見る見る半ばまで埋め込まれて行く様子を嘆然として見詰めながら、森に問い合わせた。

「ああ・・彼女は実の母親が不倫の罪で処刑された後、一時好色なシーモア男爵の家に居たことがある。この時シーモア男爵と男女の仲になったと云う話がある。罪人の娘として寄る辺も無くシーモアの誘惑を断れなかつたのだろう・・それに彼女の好奇心の強さも関係しているのかも知れない」

「兎に角処女じや無かつたという話か・・」

額に汗を浮かばせながらとうとう根元まで呑み込んでしまつたエリザベスに一息の休みを与えると、次にゆっくりと腰を動かし始めた。

がつついた男の様に遮二無二ピストン運動をするのではなく、女ならではの女の性感を知り尽くしたかのようにゆっくりと腰を前後させ、性感のポイントを一つ一つに掴みながら着実に責め上げて行った。

朱美の腰の動きに煽られ、エリザベスの呼吸は次第に早くなつて行き、苦し気に眉を顰め、耐え切れず何かを掴むように両手をグッと握り締めた。

(アアーッ・・もう・・もう・・) 朱美とその部分で一つに繋がつたまま、ゼイゼイと息を吐きながら苦し気に身を捩つた。

「もうイッても良いのよ・・」今や激しく腰を振りたて最後の追い込みにかかつた。

ヒィー！と一声上げると身体を激しく反らせた。

その瞬間股間から激しい放水迄始まり、エアマットをビシャビシャと叩いた。

「おお！汐を噴いたぞ！」

「違うな・・あれはただの小便だな」

男達は、精魂尽きたように半身でマットの上に倒れ伏したエリザベスの姿を見て衣服を脱ぎ捨てた。

「それじゃ次は僕達で楽しませて貰おうか」と、朱美を押し退けマットの上に載って来た。醜い男性器を隆起させながら自分の傍らに寄り添う二人の男を目にしてその意図を察して、意識を取り戻した王女が「奴隸の分際で妾に無礼な事をしたら許しませぬぞ！」と毅然として叫んだのを自動翻訳機が的確に訳した。

「あんたは自分の立場が分かっていないようだな！奴隸はお前で僕達はご主人様だ！」

森から激しく頬を撃たれ、翻訳機から流れ出す声に青くなったエリザベスであったが、現在自分が置かれているこの異常な事態を思い知らされ抵抗が無駄で在る事を思い知らされるのであった。

朱美から散々イカされて鉛のように重く動きの鈍いエリザベスの両脚を突然掴むと思い切り左右に押し広げた。

突然男から股を割られてその中心の秘奥を覗き見られる羞恥と、飢えた目で見詰める男の次の行動を予想して、両手を激しく振って抵抗した。

「この手が邪魔だな！よし、縛ってしまおう！」

林が持ち込んだバッグの中から麻縄の束を取り出した。

森が両脚を握り下半身の動きを封じている間に、朱美も手伝ってエリザベスの両腕を高手小手に縛り上げてしまった。

窮屈に縛り上げられた両腕がキリキリ痛んだが、それより耐え難かったのは、相変わらず両脚を扇の様に開かされ、剥き出しになった秘裂を覗き見られる事であった。

エアマット上に横たわり王女は屈辱と憤怒と羞恥が折り重なって襲いかかり、顔を赤くしてブルブルと激しく左右に振り立てたが、最早恥ずかしい個所を隠す手段は失っていた。

朱美からディルドウで責め立てられ、何度も気をやった部分はまだ完全に閉じ切っておらず、薄っすらとその入り口を開いたままであった。

その僅かに開いた華洞の内部から未だに粘っこい樹液がジクジクと流れ出していた。

「これだけ濡れていたら前技は不要だな」

森が両脚を握り締め大腿が胸に着くまで折り曲げて剥き出しとなった秘園に、怒張した先端を押し当てた。

ヒーッ！王女の口から悲鳴が上がった。

これまで白人男の男根は受け入れた事があったが、得体の知れない人種の男から犯されると恐怖を覚えた。

それはこれまで経験した男達の物より硬く熱く大きかった。

朱美との性交ですっかり濡れすぼった肉洞は森の大きな（森や林のモノは平均的日本人より大きかった）陰茎を抵抗なく受け入れて行った。

「これが将来王女となる女のオ████か・・良い気持ちだぜ！」

エリザベスの極上の内部を味わいながらズブズブと長大なモノを埋め込んで行った。

「ちょっと！アンタが汚したモノを綺麗にするんだよ！」

まだペニバンを穿いたままの朱美がエリザベスの亜麻色の髪を驚掴みにすると隣に腰を降ろす自分の股間に導いた。

目の前に突き付けられた愛液に濡れた黒光りするものに嫌悪を感じて顔を背けようとしたが、そうはさせじと握り締めた髪を強く掴み、「自分の身体から流れ出たもんじやないか！何を嫌がっているんだい！」と、陰陥な笑みを浮かべて固く閉じた唇にグリグリと押し付けた。

朱美の声は自動翻訳機を通す様に設定されていなかったが、朱美の意図を察したエリザベスは目に涙を一杯に溜めながらオズオズと固く閉ざしていた口を開き、それを受け入れて行った。

いまや下腹では森が激しく腰を振るい、淫風に煽られたようにエリザベスは頬を膨らませて朱美の股間に取り付けられた長大なディルドウをしゃぶっていた。

「俺だけ独りぼっちのものあれだな、朱美嘗めてくれ」

男女三人の愛欲図を眺めていた林がキリキリと隆起したモノを朱美に見せ付けた。

「良いよ・・」朱美が長い髪をサッと搔き揚げて林のモノを咥えた。

それからソープの一室は男二人女二人が相手を代え体位を代えての愛欲図でムッとするような淫風が吹き荒れた。

森がエリザベスの膣内に思いのたけを放射して満足した後、今は林が激しく突き立てていた。

男二人から散々責め立てられ、放心して人形のように大人しく抱かれるままの女がいた。

ピチャピチャと肉擦れの音に交じって突然グーッと大きな音がエリザベスの腹から響いた。

「コイツ、大分腹を減らしているようだな・・」

相変わらずせっせと腰を使いながら呆れたように口にした。

「ああ・・牢に居る間碌な物を食べていないだろうからな。これから浣腸しようにもこのままじゃ、大したモノも出てこないだろうから、何か浣腸の具になるものを食べさせてやれ」

「朱美！フードデリバリーに電話してくれ！」

額に汗を浮かべて腰を前後させエリザベスの女体を堪能しながら命じた。

「全くソープに来て飲み食いする客なんて始めて見たよ」

届けられた大量のご馳走を頬張る林を見ながら呆れた様に口にした。

「まあ、そう言うなよ、朱美お前も食べて見ろ。美味しいぞ！」

届けられたまだ温かいピザの一切れを差し出した。

ご馳走を口に運ぶ二人の前で、後手に縛られたままのエリザベスが背後より森に突き立てられていた。

尻を高く擡げ森のモノを受け入れながら、目の前の床に並べられたご馳走に顔を突っ込み何かに憑りつかれたように夢中で咀嚼していた。

耐えに耐えていた飢餓感の前には、激しい性感も姿を隠した様であった。

「全く皿に顔を突っ込んでガツガツ大食いする王女様なんて始めて見たぜ！淑女の気品なんてまるで無いぜ！」

口の周りだけでなく顔全体を食べ物で汚しながらも狂ったように食べ続けるエリザベスの姿に蔑む様に言った。

「牢に入っている間はこんな旨いモノを喰ったことが無かつたから必死になって食つてやがるぜ」

背後から腰を使いながら森が呟く様に言った。

「今でもイギリスには旨い食べ物なんて無いぜ！こんなご馳走を食べたのは生まれて初めてじゃ無いか？」

自分がどのように見られているのかも気にする余裕も無く夢中でご馳走を貪る哀れな王女の姿が在った。

たちまち数人分の料理を平らげ、ゲーッ！と下品な音が喉から響いた。

食べることに必死なエリザベスは自分が出した蛙の様な下品な声にも気付いていない様だった。

薄く窪んでいた腹も前にせり出して来た様に見えた。

夢中で皿の中に顔を突っ込んでいたエリザベスであったが、食べるペースが目に見えて遅く

なった。

「もう良いのか？」

森が背後から深々と突き立てたままエリザベスの身体を引き起こした。

そして、汚れた顔や口の周りを優しく拭ってやった。

「食べるだけで、飲み物を飲んでいないから喉が渴いたろう・・」

と冷たいコーラのコップを口に押し当てた。

最初は、初めて口にする刺激的な味に戸惑い、咽んだ彼女であったが、一口二口飲み進む内に冷たい甘美な液体を気に入ったのかゴクゴクと喉に流し込むようになった。

「そら、沢山飲むんだよ・・」

エリザベスの口にコップをあてがいながら優しく言った。

「後で俺達の濃厚ミルクも飲ませてやるぜ！」

その様子を見ながら林がゲラゲラ笑った。

背後からエリザベスに突き立てながら、両手で乳房と股間を撫でた。

久しぶりにご馳走を満腹になるまで食べた幸福感で森の手を拒む様子は無かった。

森の手捌きに甘い声を上げる様になっていた。

せり出した柔らかな腹を撫で回しながら、これだけ食べれば後の浣腸が楽しみだと思う二人であった。

「それじゃ、邪魔したな！」

支払いを済ませると、今は縄を解かれていたが全裸のままのエリザベスを両側から挟むように抱えて出て行こうとしていた。

「ちょっと！そんな裸の女を連れて何処に行く心算だい？」

「何、心配することは無いさ」

と言うと扉をバタンと閉めた。

「ちょっと、ちょっと！忘れものだよ！この汚いゴミを持って行きな！」

エリザベスの着ていた汚れて悪臭を放つ囚衣を指先で摘まむようにして三人を追いかけドアを開けた時、三人の姿は忽然と消えていた。

三人が再び姿を現したのは、アダルトグッズのショップであった。

大きなビルに中に在り、1階から5階までアダルトグッズを並べている日本でも最大級の店であった。

眩く輝る靄の様なものに全身が包まれ、その靄が腫れた時、自分は見知らぬ建物の中に居ることに気付きエリザベスは慌てた。

建物の中には何人かの男性が居るのに気付いて羞恥心に襲われ、驚愕して自由な手で乳房と股間を隠したが、おずおずと俯いていた顔を上げると、周囲の男達はまるで石像のように動かなかった。

森がタイムマシーンを操作し、時間を止めていたのだった。

「何時までも裸のままじゃしょうがないから服を買ってやるぜ」

狼狽するエリザベスの顔を見ながら言った。

服を買ってやると言われて周囲を見回しても、卑猥なデザインの下着の様なコスチュームばかりで、裸でいるのと差は無いように感じられた。それどころかマネキンに着せられた服を見ると女体が淫靡に強調され一層卑猥な感じになるように思われた。

これなんかどうだ？

いや、こちらの方が良い。

森と林が面白がって次々にコスチュームを手に取り狼狽するエリザベスに見せ付けた。

「まあ試着してみたらどうだ？」

林が細い革ベルトを金属環でつなぎ合わせたポンデージスーツを手にしてひらひらと見せつけた。

二人は面白がってエリザベスに着付けた。

ポンデージスーツは裸身を隠す役目はまるで果たしておらず、胸の上下を通る革ベルトは乳房を縫り上げ前に絞り出し、剥き出しの股間には細い革ベルトが深々と食い込んでいた。

「中々良いじゃないか！良し、キープしておこう！」

こうして二人は次々と卑猥なコスチュームを着せたり脱がしたりして楽しみ、気に入った物をどんどんバッグに仕舞って行った。

「これなんかどうだ？」

薄い布地の股割れパンティを見せつけた。

ピンク色の可愛いデザインであったが中心部分に布地が無く肝心の女性器部分を隠す役割はしておらず、逆に亀裂を強調して卑猥感を増幅していた。

幾つもの衣装を物色してバッグに詰め込んだ後、フロアを代えた。

そこは男性器を模したオモチャが展示してあるフロアであった。

エリザベスには理解できない場所であったが、展示されていた品物の意味は理解でき、頬を赤らめた。

二人は並べられた淫具の中から幾つかを取り出し、面白がってエリザベスに使用して悲鳴を上げさせた。

「さて、これから繁華街と一緒に散歩しようというのだが、流石に素っ裸ではまずいからな・・」

二人はバッグの中からビキニ水着のようなブラジャーを取り出して、着けさせた。

それは乳房全体を覆い隠す役目は果たしておらず、かろうじて極小の布地により乳首を隠すことしか出来なかった。

腰には股割れパンティを穿かせた。

「これじゃワレメちゃんが丸見えだな」

「それじゃこれで隠してやろう・・」

森が中央に何個かの真珠球を数珠つなぎにした紐を手にした。

紐の端をパンティの前に固定すると股間を通して思い切り締め上げた。

真珠球が秘裂に食い込み、その内幾つかが柔肉の間に埋没した。

男達の残忍な行為にイヤイヤと涙を流して拒絶していた。

水着の腰に巻くパレオのような薄い布地を巻き付けた。布地の丈は短く極小のミニスカートのように歩くとチラチラと股間が覗けた。

二人は変装用のサングラスをかけると、左右からエリザベスの腕を掴んで、「さあ、行こうぜ！」と屋外に連れ出そうとした。

外に出ることを涙を流して拒絶したが、両側から手を引かれて強引に連れ出された。

三人がビルの外に出ると凍結していた時間が再び流れ出した。

昼下がりの繁華街の通りに多くの通行人が居た。

その内何人かはエリザベスの扇情的な姿を目にして、

「おい！あれ、きわどいな！外人の露出狂かな？」

とか、

「おい！あれ、ノーパンじゃ無いか？」と短いパレオの端から歩くたびに見え隠れする陰唇の端を目にして街路の男が声を上げた。

履き慣れないピンヒールの踵の高さに時々転びそうになるのを両側から森と林が支えたが、その都度パレオの奥からは白い生肉が現われた。

道行く男達は好色な視線でエリザベスの一行を追い、女達は不潔な物を見たと言う様に目を背けた。

「おい僕達の姿も監視カメラに撮られているんじゃないか？」

街の其処個に仕掛けられたカメラを気にして林が気弱そうな声を上げた。

「大丈夫だ！妨害電波の発射器を持っている。僕達の傍の監視カメラはノイズが乗って鮮明に映らない」

股間に食い込んだ真珠球が歩くたびにエリザベスを苦しめた。

特にピンヒールに慣れず、姿勢を崩す度に意地悪く股間を刺激した。

道行く男達の熱い視線を浴び続ける内に強烈な羞恥心でエリザベスは意識が遠退きそうになっていた。

自分の目にしている世界も自分の身に起きているすべての事もエリザベスには理解不能であった。それでもこの事態を何とか理解しなければ、このまま自分は発狂してしまうのでは無いかと恐怖を覚えた。強いて理解しようとすれば、これは現実ではなく夢の中に居るのではないかという事であった。

これが夢なら何も恥ずかしがることは無い。むしろ夢の世界を探検してみたいーと、持ち前の強い好奇心が心を擡げて来た。

エリザベスは両側から手を引かれなくとも男達と並んで自発的に歩き始めた。

人目を避けるように小さく身を縮めて俯いて歩くのでは無く、ピンと身体をそらせて歩くと、股間を抉る真珠球が妖しい刺激を与えた。

その刺激に煽られ自然と乳首が勃起して来たが、極小のビキニの裏地のザラザラとした感触に思わずアッ・・と溜息を漏らした。

夢見る様に薄く瞼を閉ざし見る見る頬が紅潮して行くエリザベスの様子を見て、「何だ、感じているのか？」と、問い合わせた。

林が後ろからエリザベスの股間に手を差し入れた。

「何だ！もうビショビショじや無いか！」

股間に埋没した真珠の上の温かいヌルっとした粘液を指先で掬い取って嬉しそうに大声を上げた。

股間から込み上げる甘美な刺激に歩みは遅くなり、切なそうに身体を震わせていた。

「もう歩けないようだな？一度スッキリさせてやつたらどうだ・・」

カフェのガラスウィンドウに両手をついて身体を支え、上気した貌で切なそうに息を吐くエリザベスを見ながら林に促した。

パレオを捲り上げ薄い股割れパンティを穿いただけの尻を剥き出しにすると、秘裂を抉っていた真珠球の紐を外した。

秘奥から滲み出たネットリとした愛液にヌラヌラと濡れ光る真珠の粒を繁々と見詰め、鼻の傍にぶら下げ臭いを剥ぐ仕草をしたので、羞恥が込み上げイヤ！と顔を背けた。

「ここが欲しがっているんだろう？」

エリザベスの背にピタリと身体を密着させて、手を股間に延ばしてビショビショに濡れた秘園をまさぐった。

ウワアーッ！林の指が肉壺に侵入してきた時、感極まった様な声を発した。

劣情に駆られた林はエリザベスの肉欲を一層昂き立てる様に指を捏ね回した。

秘奥で蠢く指の動きに煽られてエリザベスの腰がブルブルと震えた。

もう立っていられないように、両手をガラス窓に着いたまま淫情に悶える顔を窓に押し当たった。

エリザベスの時代には無かった物なので彼女は、ただの滑々する壁と思い込んでいたが、そのガラス窓はスモークガラスで外から室内の様子は見えないが、中からは表の様子が見える窓であった。

喫茶テーブルを挟んだ若いアベックが突然窓の外で繰り広げられる淫猥な景色に啞然として声を上げることも出来ず目を見張った。

押し寄せる快美感に煽られ上体をガラス窓に押し付けて身悶える内に、小さなビキニは、ズレて、剥き出しとなつたピンク色の乳首は窓を擦った。

背後からの圧力でガラスにピッタリと押し付けられた乳房が潰れて丸い形を作りその中心に固くしこつた果実の様な乳首が埋没していた。

二人とも魅入られたように窓の外を見詰めていると、男の指が女の亀裂の奥深くに埋没し、淫靡に搔きまわす様子が目に突き刺さつた。

防音構造で外の喧騒は余り室内に流れ込まない様になっていたが、それでも僅かに外の音は聞こえていた。女壺を搔きまわすピチャピチャという音に血走った目で見詰めながら耳をそばだてた。

林の指使いにより耐えられないと、ビクビクと身体を痙攣させるエリザベスを見詰めながら、

若い男は無意識の内にズボンのジッパーを開けておのれのイチモツを取り出し、扱き始め、彼女は自分のパンティの中に手を入れピチャピチャと慰め始めていた。

官能を煽られたエリザベスは最早まともに立っている事が出来ず、ガラス窓に頬を押し付け、開け放たれた口から流れ出た涎が窓の表面を伝って流れ落ちた。

込み上げる快美感にヨガった顔がガラス窓に押し付けられ室内から変形して見えた。

この状況に気付いたカフェの客が、アベックのテーブルを囲む様に押し寄せ何重にも人垣を作つて扇情的な景色に釘付けとなつた。

これで止めをさしてやれーと、アダルトショップで入手して来たバイブレータを手渡した。

カフェの中の客はその大きさに息を呑んだ。

ズーンと振動するバイブがズブズブとエリザベスの膣内に埋め込まれて行った。エリザベスの目が裏返り、カフェの中の客の男達の多くは我慢しきれなくなって激しく放出した。カフェの中に栗の花の匂いが拡がつて行った

「拙いな、警官がやって来た！ここは一先ず引き上げるぞ！」

誰かが通報したのだろう。制服を着た警官が二人こちらに駆けて来る様子が目に入った。

タイムマシンのリモコンスイッチを操作した。

たちまち三人の姿はキラキラと眩く輝く靄に包まれた。

三人が再び姿を現したのは暮色の迫る広い公園であった。

バイブを握り締めたままの再び林がエリザベスに迫つたが、既に絶頂を経験したエリザベスの性感は低下していたようで、待つてーと、拒んだ。

「待つて、お腹が痛いの・・」

下腹を押えて身を畳むエリザベスの様子を見て、「ウンコが出そうなのか？」と森が尋ねた。身体を蝦の様に折り曲げて苦しむエリザベスが恥ずかしそうに頷いた。

「大量のご馳走を食べて胃が膨張して、腸を圧迫して便意が誘発されて来たのだろう・・浣腸の手間が省けたってもんだ！ここで出してみろ！」

「え！？こんな所で？」

「ちょうど人が居ない。恥ずかしがることも無いだろう。僕達の前で散々恥ずかしい姿を見せて来たお前だからな。」

「ここに手ごろなプランターが在る。おまるだと思って此処にヒリ出すんだ！」

近くに並べられた花の植え替えを待つ木桶の様な形をしたプランターを指さして笑って言った。

「その前に両手を縄で縛っておこう。その方がムードが出るからね・・」

林が麻縄を扱きながら迫った。

「何、心配することは無い・・後始末は僕達が優しくやってやるから・・」

地面に両膝を着いたエリザベスは俯きながら黙って両手を背後に廻した。

きっちりと縄止めを済ますと縄尻を握って立ち上がらせ、パンティを剥ぎ取られて剥き出しの尻をピシャリと叩いた。

込み上げる便意に耐えかねて、林に縄を引かれながらフラフラとプランターに歩み寄り、その上に跨った。

切迫する排便欲求でプランターの上でウンウンと息むが、しかし便を出すことが出来なかつた。

「どうした？出ないのか？」

額に汗を浮かべ歯を食いしばって息む様子を楽しそうに眺めた。

「長い獄中生活で排便習慣が乱れて腸内で便が石化しているんだろう？見てやるからこちらにケツを向けるんだ」

街灯がほの明るく照らすベンチの上にうつ伏せに寝かせて尻を森の方に向けて高く擡げる屈辱の姿勢を取らせた。

「ああ・・審問官でもそんな酷いことはしなかったわ・・」

「僕達は審問官じゃ無くご主人様で、お前は奴隸だ！」

「ああ・・」

森が尻たぶの間に咲く色素沈着の無い綺麗な小菊を見詰めて、その上を親指の腹でグイグイ押した。

「ああー・・イヤ・・恥ずかしい」

女性器とは別の羞恥の器官を撫でられ、顔を赤くして尻を振った。

ふーんーと、一つ息を吐くと、アダルトショップで仕入れた肛門用の潤滑オイルを手にして、たっぷりと絞り出し小菊の中心から周囲に向かって丹念に塗り込み始めた。

初めの内は、男の指先で排泄器官を何度も繰り返しマッサージされる羞恥と、くすぐったさに腰を振っていたエリザベスであったが、じれったい様なヌルヌルとしたオイルの得も言わ

れぬ感触が恥孔の周囲に感じ出し、ああ・・と、甘い声を上げる様になっていた。

直ぐ下の秘園が充血を始め、透明の液が滲み出していたが、森は構わず右手の中指に潤滑油をたっぷりと塗した。

イヤーッ！突然男の指が肛口を割って奥に侵入して来たことを感じて悲鳴を上げた。

「何だ！これは？」

埋没させた指先に大量の石化した便塊の存在を感じて声を発した。

「こんな硬いのが出口のところで詰まつていては出すに出せないな・・」と、肛門の直ぐの傍まで硬化した便が押し寄せている事を知り、一つ溜息を吐いた。

指先で石のようになった便塊をコロコロ転がしながらどうしたものかと思案した。

直腸内で男の指先で便塊を捏ね回されるエリザベスはその気持ちの悪い刺激に悲鳴を上げ腰を悶えさせた。それでも一方では、込み上げる便意に腹を押えて苦悶していた。

「ちょっと痛いが我慢しろ」

と、肛門鏡を取り出し嘴部分に潤滑材をたっぷり塗すとズブリと肛門に突き立てた。

冷たく硬い金属製の円錐がズブズブとめり込んで来て、痛みより無理やり肛口を押し広げられる不気味な感触に眉を顰めて呻き声をもらした。

深々と肛門鏡が直腸内に埋没したのを確認した森はネジを回して肛門鏡を展開し始めた。

嘴の様な形をした三枚の金属片が無残に拡がって行った。嘴の隙間から腸壁の赤黒い粘膜が垣間見えた。

肛口の筋肉の緊縮力をあざ笑うようにグイグイと広げられていく状況に背中に廻した掌を握り締め額に汗を浮かべ苦悶し続けた。

「ふふ・・臭いのが臭って来たぞ・・」

押し広げられた直腸の奥から強い便臭が立ち昇って来ていた。

「ああ・・おっしゃらないで・・」

ベンチに押し付けた頬を染めながら咽び泣くように呟いた。

最大限に肛門鏡を押し開くと、耳かきの様な先端形状で細長い柄をもったステンレス製のスプーンの様な物を手にした。

「今からこれで石ころみたいになった糞を掻き出してやるからね・・」

ああ・・と、肛門鏡を突き立てられた尻を森の方に向け淫靡な作業を受け入れながら呻くよう声を上げた。

ペンライトを片手にして内部を照らしながら腸壁を傷付けないように注意して、耳かきの様

な形状の先端でせっせと水気を失って硬化した便を掻き出した。

直腸の奥からコロコロとほじくり出された便塊が次々と足元に落下して行った。

「どうだい？耳糞を取って貰っているように気持ち良いだろう？」

鼻の頭に汗を浮かべながらウンウンと鼻を鳴らすエリザベスを揶揄った。

「耳糞じゃなくて本当の糞だがな」

と、林が笑って混ぜ返した。

排泄を希求する腸内圧力に押されて硬化した便塊が次々と奥から押し出されて来るようであった。

掘り進む内に水気を失って固くなっていた便が少しづつ水気が増して行くのを感じていた。

柄の届く範囲で粗方の便を掻き出した森は、肛門鏡を抜き取り「これだけ掻き出せばもう出せるんじゃないかな？」と尋ねた。

尻を高く擡げたまま、ウンウンと息んだがまだ腸の奥の方で固まっている様で排泄出来ずにいた。

「この後は、浣腸液で奥の方の便を柔らかく溶かすしか無いな。大分柔らかくなってきていい様だから多分これで開通するだろう・・」

急激に腸の発作が起こらないようにグリセリンではなく水道水を大型のガラス浣腸器に注ぎ、何度も体内に流し入れた。

グリセリンと異なり直ぐに腸の痙攣は起こらず、下腹の膨満感だけであったが、次第に腸に違和感を感じる様になって来た。

エリザベスの表情の変化を見た森が、「まだ駄目だ、30分間我慢して腸の中の硬くなった便を溶かすんだ」と、叱りつけた。

「ああ・・そんな・・」

次第に強くなって来た下腹の痛みに、そんな長時間耐えられないと気弱な声を上げた。

「大丈夫さ！これで栓をして押さえておいてやる」

巨大な樹脂製のホオズキ型のナルプラグを手に取り、痛がるエリザベスの肛門に無理やり押し込んで行った。込み上げる排泄衝動でナルプラグを咥え込んで押し広げられた排泄口がピクピクと収縮を繰り返していた。

水浣腸を受けてかなり時間が経っていた。森と後ろ手に縛られたままのエリザベスは並んでベンチに腰を降ろし、股間に手を押し入れた森はナルプラグが飛び出してしまわないよう

端を押えていた。

アナルプラグの平たい底を抑えながら、エリザベスの腸内の擾乱を指先に感じていた。

排便を封じられた哀れな王女は森の隣で腰をブルブルと震わせ切なそうに呻き声を上げ続けていた。

「ああ・・もう・・」最早耐えきれないと言う様に切ない声を漏らした。

「もう少し我慢するんだ！」とピシャリと言うと、「おや？誰か来たぞ、アイツの目の前でウンコをしてみるか？」と意地悪く尋ねた。

公園に散歩に来たのか初老の男がブラブラとゆっくりこちらに近づいて来るのが見えた。

エリザベスの裸体の上にコートが掛けられた。薄暗い園内では仲の良いアベックが並んでベンチに腰を降ろしている様にしか見えなかつたろう。

コートの下に差し入れた森の指先に外部に出口を求めて渦巻く濁流の圧力を受けてピクピクと蠢くアナルプラグの動きを感じていた。

森に肛門栓を封じられながら、もう我慢できないーと、心の中で気弱に思った。

白髪交じりの男は所在無げにブラブラ歩き、時々立ち止まつたりしていた。

ああ・・早く行ってーと、心の中で呟いた。

男のノロノロとした動きはエリザベスには何時間にも感じた。

冷や汗を流して耐えるエリザベスであったが、二人の様子を気に留めることも無く男は再び歩き出すとノロノロと通り過ぎて行った。

男の姿が完全に消えるのを待って、身体の上に羽織らせていたコートを取ると、「待たせたな、もうやっていいぞ」と言った。

後ろ手に縛り上げた縄尻を引いてベンチから立ち上がらせた。

明るく光る街灯の下に連れて行って、しゃがませた。

「ああ・・こんな所で」と恨めし気に男達を睨んだ。

縄尻を街灯のポールに縛り付けると、さあ、始めるんだーと、強引にアナルプラグを抜き取った。

林が決定的瞬間を逃すまいと、スマホのカメラを向けた。

我慢の限界を遠の昔に過ぎていたエリザベスは腰をブルッと震わせると、「イヤ！見ないで！見ちゃイヤー！」と叫び声を上げた。

そのつんざく様な悲鳴と共に激しい放水が始まった。

滝のような怒濤の水流が地面を叩き、高いピンヒールを穿いた足元に飛沫がかかった。

足元に池を作った汚水の中に大量の浣腸液により腸内で碎かれた硬い便塊が幾つも混じっていた。

夥しく汚濁の液を放出していたエリザベスであったが、放水がピタリと止まった。

「これからが本番だ！」

エリザベスの様子を眺めながら森が片頬を緩めた。

ウーンと、一声漏らしブルッと腰を震わせると、ビチビチと軟化した便を吐き出し始めた。一続きに肛門から垂れた便は真下にくるくると蟠局を巻いていった。

まるで蛇が蟠局を巻くように見事に形作られていく汚物の山を男達は嬉しそうに眺め続けた。ハアハアと息を吐きながら男達の淫靡な視線の前で羞恥の姿を晒し続ける無残な王女の姿があった。

一旦放出が終わったが、次を期待する男達を待たせる事無くウンウンと尻を振り続ける内に次の排泄行動が始まった。

腸内圧力に押されてズボッと大きな音をさせて肛口を押し開け飛沫を上げた後、築き上げた蟠局の上にブリブリと軟化した大量の便の山を築いて行った。

身体を小さくして嗚咽しながら排便を続ける女に男達は快哉の笑い声を立てた。

「もう終わりか？」と問い合わせると、恥ずかし気に小さく首を横に振った。

ブリッと名残り惜し気に腸内に残留していた最後の汚物を放出し終えると、エリザベスの嗚咽は一層激しくなった。

顔をクシャクシャにして泣きじゃくる女に、「これで腹の中もすっきりしたろう・・」と笑い掛けた。

「風通しも良くなったところで、後ろも楽しませて貰おうか！」

「その前に糞まみれの穴の周りを綺麗にしないとな」

二人はエリザベスの縄を解き両側から抱える様にして、公衆便所の女子トイレに連れ込んだ。幸い室内には誰も居なかった。

個室の扉を開けて三人で中に入った。

モダンな公衆便所で其処には温水洗浄トイレが備え付けられていた。

目の前の白い便器を見て、自分の知っている便器とはまるで違うが、それが何であるかエリザベスには直ぐに理解出来た。

女を便座の上にしゃがませると、男は傍らのボタンを押した。たちまち暖かなお湯が彼女の肛門周りを洗った。

こんな便利な便器が在るなら何故最初から使わせてくれなかつたのかーと、恨めし氣に男達を睨んだ。

温かいお湯で心が解れたエリザベスの秘裂から一条の黄色い水が流れ出た。

ビデも使って股間の汚れを綺麗に落とし、トイレットペーパーで綺麗に拭き上げた。

「さてと、さっぱりと綺麗になつたところで、早速後ろを頂くとするか」

「しかし、こんな所じや王女様を頂くにはムードが無いな・・」

「それじや、俺のマンションに行こう」と林が言った。

「しかし、お前変態の割には部屋が綺麗だな！」

「変態と綺麗好きとは関係ないさ！」

森の声に林がぶっきらぼうに応えた。

フカフカの絨毯が敷かれた広い部屋の中には独身の男性にしては大きすぎるベッドと低いコンソール上の大型の平面テレビが在るだけだった。

他の物は壁一面に設えられたクローゼットに押し込んでいるようだ。

時々変態仲間を呼んで乱痴気騒ぎをするため、部屋を広く使えるように物を置かず床も片付けておく主義であった。

「見てみろ！」

エリザベスに向かって言った。

大型テレビのスイッチを入れると、スマホと連動した画面が現れ、今日一日エリザベスの痴態を映した映像が現わされた。

真っ赤になって両手で顔を隠すエリザベスの手を掴むと、「自分の恥ずかしい姿を見ていると燃えて来るだろう？」と、ベッドに押し倒した。

「ここは俺の部屋だからエリザベスの初物は俺が頂くぜ！」

「ああ・・良いだろう」と、森もあっさりと了承した。

エリザベスには林が口にした”初物”の意味が分からぬ様だった。

エリザベスの両手を掴んで万歳をする形でベッドに仰向けに寝かした林は、裸の胸や腹に口付けの雨を降らせた。

テレビに映る自分の痴態と大音量で流される自分の恥ずかしい声に呆然とするエリザベスは、

まるで悪魔に魅入られたように無抵抗に林の唇の雨を受け入れるのだった。

痛い！林が両の乳房を頬張り、先端を口の中に吸い上げ、舌先で乳首を転がした後、乳首を甘噛みしたので軽く悲鳴が上がった。

エリザベスの反応に満足したように掴んでいた彼女の両手を離すと身体を起こした。

一旦ベッドから離れ、麻縄を扱きながら戻って来た時、エリザベスはポッと頬を赤らめ、ベッドの上に座っていた上体を俯け、縄を催促する様に両乳房を押えていた両手を黙って後ろに廻して交差させた。

「今日1日でこの味が分かったようだな・・」

王女に縄掛けして行きながら、嬉しそうに笑った。

後ろ手に縄掛けし、余った縄を前に廻して、上下から乳房を縊り出す様に縛り上げて縄留めした。

「美味しいもんを腹一杯食って、ココも大きくなったんじやないか？萎れていた花に水を上げたようなもんだ！」

背後から若い王女の乳房を揉みしだきながら笑って口にした。

「栄養が回って肌も艶々して来たみたいだぜ！」

滑々した柔らかな乳房を両手で揉み上げた。揉み上げる掌の間から固く屹立した乳首が見えた。

固くしこった肉芽を指先で弾かれたので、ツーッ！という声がもれた。

一頻り乳房への悪さに満足すると、突然王女の背を蹴り上げた。

林に背後から蹴られ、尻を上げた形で顔からベッドの上に落ちて行った。

高く擡げられた雪白の尻を両手で抱え込んだ。

そのまま両手で尻たぶを左右に一杯に割った。剥き出しとなつた薄い粘膜に下卑た男の熱い息がかかり悲鳴が上がった。

林の視線の先にそれが在った。

シミ一つ無いぬけるような白い肌の中心に僅かに董色を帯びた可憐な花が一輪咲いていた。

男の熱い視線を剥き出しにされたその部分に感じ、エリザベスはそれが熱く炙られる様に感じた。

変色も変形も無く中心に向かって容良く刻まれた幾本かの皺で描かれた可憐な肉の蕾を見詰めていると、この女は用便以外にこの穴を使った事は無いだろうと確信した。

自分が初めてこの女の背徳の穴を占有できる幸福に浸った。

憑かれた様に、林は女の尻の間に顔を突っ込んだ。

男の熱い唇が、身体の中の汚らわしい部分に張り付いた事に気付きヒーイ！と悲鳴を上げ身を揉んだ。

エリザベスの身悶えを両手でがっちりと封じると、唇でその部分を摩った。

そして、夢中で舌を伸ばしてその内部に突き入れた。

長い間の宿便で重苦しい気分を与えられ続けていた箇所であったが、直腸に硬結していた便を掻き出すという森の便秘治療（？）により、久しぶりに清々しい気分になった所に林の舌先が侵入して来た。

その背筋がゾクゾクするような刺激に視界は白くなり息が上がった。

林は王女が荒い息を吐き腰をビクビク震わせているのを目にして益々激しく舌先で責め上げた。

ヒィと小さく悲鳴を上げてエリザベスの全身から力が抜けて行った。

今が頃間と感じ、うつ伏せに横たわるエリザベスの両脚を扇の様に開き、その菊花の中心に猛り立ったものを押し当てた。

「アーッ！そこは違う！そこは違う！痛い！助けて！」

民衆の生活を厳格に規定していた当時の宗教で固く禁じられていた禁断の穴を使った交わりを迫られていると分って心臓が止まりそうな戦慄を覚えた。

思いもよらぬ所に攻撃を受けて身を揉んで悲鳴を上げた。

そんなエリザベスの哀願にも関わらず、ドクドクと脈打つ熱い肉塊がジワジワと狭い肉の輪を押し広げて侵入していた。

潤滑材は使っていなかったが、林の唾が潤滑の役目を果たした。

王女の悲鳴を心地良い音楽の様に聞き流しながらグイグイと奥に進めた。

とうとう根元まで押し込んだ林は一旦動きを止めて、若い王女の媚肉を内側からその肉棒で味わった。

限界まで広げられた輪状の筋肉が精一杯の抵抗を示す様に陰茎の根元を締上げた。その締め付けの強さにウットリとした声を上げた。

しばし、極上の内部を分身で堪能した後、少しづつ腰を動かし始めた。

「イヤ！痛い！動かさないで！」

林の雁の張った太い肉棒に腸が引きずり出されるのでは無いかとの恐怖に襲われ悲鳴を上げた。

一方、林は泣き叫ぶ女の哀願を無視して、長いストロークで激しく腰を動かし始めていた。肉茎を引き出す時は赤黒い腸粘膜を伴って引きずり出し、打ち込む時は周囲の肉を巻き込んで埋め込んだ。

腰を振り続ける内に、最初の「抜いて！抜いて！」と泣き叫ぶ、哀切な号泣は次第に小さくなっていました。それに代わってハアハアと荒い息に交じって切なそうな喘ぎ声に代わって行った。

聖書に登場する悪魔に自分は今抱かれているのでは無いかと思う戦慄と、宗教上の禁忌を犯しているという背徳的愉悦を同時に感じていた。

始めてのアナルセックスでこの女は感じているのか？相手の身体の上に覆いかぶさるようにして激しく振っていた腰の動きを緩めて指先で自分が突き立てている僅か下に佇む秘園をまさぐった。

「ふふ・濡れてやがる」

ネットリした潤いを指先に感じてほくそ笑んだ。

「お前、ケツの穴で感じているのか？こんなにシーツをビショビショに濡らしやがって！」

「ああ・御免なさい・・」と、ゼーゼーする息の下で謝った。

厳格に定められた宗教に背くという背徳行為への懲りと、思いもよらなかつた痛感を超越した快美感に襲われ理性が崩壊しそうであった。

その後の作業がし易いように、ぐつたりとするエリザベスを自分の身体の上に載せる様に体位を変えた。

下から腕を伸ばして、濡れそぼる雌穴に人差し指と中指を挿入した。

膣の薄い壁を通して、直腸内に突き立てられた自分の男根をなぞった。

薄い隔壁を挟んで、肉茎と二本の指で摩擦される強烈な刺激に泣き声を上げて悶えた。

ドクドクと溢れ出す樹液を指で搔き出し続けた。

「もう我慢できん！俺も加えろ！」と、森が服を脱ぎ捨てると、隆々としたシンボルを突き上げてベッドに上がって来た。

林の身体の上で仰向けの体位をとるエリザベスの脚の方に身を置くと、両手で両脚を掴み思い切り左右に押し広げた。

林の怒張で深々と抉られる禁断の穴とダラダラと愛液を垂れ流す秘園が視界に入った。

肛口の輪状の筋肉を押し広げ周囲に刻まれていた皺もすっかり喪失し、腸内に長大なモノを

埋没させていた。

森の視線をその部分に感じて、涙を浮かべながら気弱そうにイヤイヤと首を振った。

花蜜を垂れ流す淫靡な花弁の中心に猛り立つものを押し当てた。

二人の男から同時に前後の穴を犯される！という恐怖に悲鳴を上げた。

最後に残されていた力で抵抗する女を二人掛の男の力で押さえ付け、ズブズブと逞しいモノを埋め込んで行った。

「ひいー！ヒィー！いや！イヤ！痛い！痛い！」

ドクドクと脈打つ森の赤熱したモノがその部分にグイグイと押し入って来る激痛と、自分の身体が壊されるのでは無いだろうかーという恐怖に悲鳴を上げて身を捩った。

二人の男は上下から腰を突き立てエリザベスの快楽源を堪能した。

同時に二人の男から蹂躪される苦痛の奥底から何時の間にか妖しい快美感のようなものが紡ぎ出されていた。

一旦背徳的な快感を意識すると理性で堰き止めていた堤が次々と壊れ、恐ろしい勢いで悦楽の濁流が襲い掛かった。

「おい！まだ逝くんじやないぞ！イク時は三人同時だ！それが出来るまで何時までもやり続けるぞ！」

エリザベスの赤く上気した貌を見詰めて森が残酷に宣言した。

上下からサンドウィッチにされた王女を追い上げるため、残忍な二人の男は腰振りのピッチを速めた。

「ああー・・もうもう・・」

眉根をグッと顰め切なげに声を上げた。

絶頂が近い事を感じた二人は最後の追い込みに入り、激しく突き立てた。

絶叫のような大声を上げて絶頂に達した。

その瞬間前後の孔の筋肉が激しく収縮し、二人の男のモノをグイグイ締め上げた。

その痛切感に二人の男は堪らず、白濁液をドクドクと体内に吐出した。

三人で浴室に入り、汗と愛液に塗れた身体を洗った。

森がボディシャンプーでエリザベスの下腹を洗ってやりながら、濡れた栗色の痴毛を撫で上げ、「こここの毛を剃ってやろうか？童女みたいに可愛くなるぜ」と、エリザベスの目を見上げながら口にした。

「私は奴隸・・ご主人様の^{おお}仰せの通りに・・」

背徳の交わりを強制され神の^{しまべ}僕から悪魔の僕に堕落させられた一と、哀切に感じて、すっかり諦めたように従順に応えた。

浴室でエリザベスの身体を様々に冒瀧した後ベッドに戻り、童女の様にツルツルに剥き上げられて二枚貝の様な淫靡な姿を晒す秘裂に前方から林が突き立て、菊花には背後から森が突き立て、第二回戦が始まり、飽く事無く男達から禁断のセックスの快感を教え込まれた。

林のマンションにエリザベスが連れ込まれてから既に三日が経っていた。

この三日の間、男二人女一人はまるでエデンの園に遊ぶように全裸で過ごし、男達は気の向くままに捕らわれの王女を相手に愛虐の限りを尽くした。

男達から残酷な扱いを受けて苦痛に喘いでも、男達により開発された若い女体はそれを従順に受け止め、堅苦しい上流社会の厳格な生活と陰険な陰謀や血生臭い政争には無縁の開放感を楽しんでいるかに見えた。

自分の方から積極的に口を使ったサービスまでするようになり男達を感激させた。

その間、エリザベスは驚くほどの食欲を見せ、朝・昼・晩の三食豪華なご馳走を完食し、その間には甘い間食まで平らげた。

摂取した大量の食物は消化吸収活動を活性化し、1日三回男達の目の前で排便してみせた。充分な栄養を摂り、獄中生活で痩せて色艶の悪かった肌にも艶が出て、しっとりとした若い女らしい素肌を取り戻す様子が男達の目に映った。

「見て！見て！こんな太いウンコが出せる様に成ったのよ！」

何時もの様に男達の目の前でステンレス製のバットの上に用便を済ませ、肛口を押し開けて出て来た太い便を自慢し男達の賛辞を求めるようにはしゃいだ声を上げた。

手慣れたものでトイレに籠り自分が排泄したモノを流し、温水で肛門を濯ぐと、鼻歌を鳴らしながら扉を開けて出て来た。

扉の外で待ち受けていた森が、キッパリとした口調で、

「もうこれでお別れだ！」

と、宣言した。

突然、思ってもみなかつた言葉に呆然とするエリザベスが森の目を見詰めた。

驚愕に見開いた眼には見る見る涙が溜まつていった。

これまで散々激烈な苦痛と同時に痺れる様な痛切な快感を教え込まれて来た憎むべき男であったが、何故か別れ難いものを感じて、涙を流しながら、両手を広げ森の事を抱き締めた。森もそれに返す様に細い身体を強く抱き締めるとエリザベスの唇に唇を押し当てた。二人は互いに愛する者の様に抱き合ったまま、舌を絡め唾液を吸い合った。その後、林とも熱い抱擁をし、口を吸い合った。

女装趣味の変態男が置いていったゴシック風のフリルの一杯付いた可愛いドレスを一切の下着を着けない身体の上に羽織らせた。

「お土産に良い物を上げよう」
森が何やら手にして言った。
それはエリザベスには見たことの無い、黒っぽい纖維で作られた得体の知れない物であった。立ち尽くすエリザベスの足元に屈むと、手早く王女の下腹にそれを取り付けた。
それは黒っぽい柔軟な纖維を編んで作ったパンティのような形をした貞操帯であった。
驚き戸惑う間にカチリと鍵を掛けた。

まるで逃えたように自分の下腹にピッタリと密着した貞操帯を見て、慌ててそれを脱ごうとしたが、ガッチリと腰に食い込んだ貞操帯はびくともしなかった。

「防弾チョッキにも使用する特殊纖維で編まれた貞操帯だ。アンタの時代の技術では切ることも鍵を開けることも出来ない・・」
と、冷たく言い放った。

森の残酷な言葉に蒼白となったエリザベスは、必死になって貞操帯を脱ごうとして、「イヤー！取って！取って！」と、泣き叫んだ。

「心配しなくとも肛門に接する所には穴が開いてるからウンコの心配は無いし、貞操帯のメントのため時々お前の所に行って、下を綺麗に洗ってあげるし、オショルに突っ込んでも上げるよ」と、冷酷に言い放った。

パニックに陥った王女の手を取ると長大なディルドウを握らせた。

「僕が行くまでに寂しくなったらそれを使うと良い。僕と林の分をスキャンして作った両頭のディルドウだ！肛門セックスの味も覚えたようだし、貞操帯の肛門の位置にも穴が開いているし」

取って！取って！と泣き叫ぶ王女を、タイムマシーンのリモコンを操作して一人元の時代に送り返した。

王女の消えた空間を見詰めながら、「エリザベスは女王になっても誰とも結婚せず、生涯
処女であったと伝えられているが、あんな物嵌められていたら結婚しよう無いわな・・」と
ポツリと呟いた。

林の呆れたような声にフフッ・・と淫靡に笑う森の姿が在った。